

# 小田原史談

第 246 号

発行所 小田原史談会  
小田原市東町 1-21-18  
平倉方 TEL (34) 8363

## 果てのない芸の噺

### —祖父と私の小田原謡曲史—

話し手 中津川悦子さん

はじめに  
私の小さい頃、この前の道（小田原市役所前の通り）は小さなバ



舞囃子「胡蝶」を舞う悦子さん  
（平成 15 年 2 月 渋谷松濤の観世能楽堂）

スがやつと通れるくらいだった。広くするんで二回セットバックしたんです。結婚したころには、この辺り（小田原市荻窪）はほとんど田んぼでした。

小田原のお城の二の丸に能舞台があったという資料がありますが、残念ながらそこで能をした記録がないのです。それこそあそこに能舞台があったということも知らない人も多いでしょうね。三代將軍家光上洛のおり小田原で演じられたとの伝えもあります。

### 明治百年記念の懐古録

この本（『小田原謡曲界明治百年記念懐古録』）は明治から昭和四十三年（一九六八）までのプログラムが清水専吉郎氏により収

録されています。東京からこういう先生をお呼びしてこういう大会をやったとか、番組の出演者の名前が出ているわけ。演能、謡曲の会が毎年何回かあったんですよ。

明治四十三年（一九一〇）の前は記録が残ってません。番組が消失されたりして残ってなかったということが清水専吉郎さんの文章に書いてありました。清水さんは古清水旅館の三代目の旦那さんでした。

この本に収録されているのは観世流だけ。宝生流さんがちよこつと入っていることがありますが他の流儀は見当たりませんので、小田原はほとんど九〇%以上観世流だったのでしよう。

東京からみえた先生は観世清廉さんとかそうそうたるお名前が並んでいます。地方へ教えに来て下さった先生というのは梅若万三郎さんとか、もちろん先々代ぐらいでしょうけどね。最初の頃は梅若さんが意外と来てらしたんですね。

\* 史談再録・清水専吉郎「明治百年・小田原の謡曲界懐古」参照

### 祖父は出稽古ばかり

祖父（吉蔵）は明治二十一年（一八八八）生まれ。昭和四十一年（一九六六）七月七日、七十七歳で亡くなった。呉服屋とかいろいろ

二百四十六号（平成二十八年七月号）

### 目次

果てのない芸の噺

—祖父と私の小田原謡曲史—

中津川悦子…………… 1

史談再録 明治百年小田原の謡曲界懐古

清水 専吉郎…………… 8

史談再録 小田原叢談（四十三）

小田原と謡曲

石井 富之助…………… 9

小田原の郷土史再発見

武藏遠山家と松田の延命寺

石井 啓文…………… 12

小田原桐座について（六）

—由緒書の検討を中心に—

荒河 純…………… 18

忘れられた地名（一）酒匂鍛冶分

杉山 虔…………… 7

神奈中「小田原町」バス停について

渡邊 喜治…………… 16

「片岡日記」昭和編（七）

片岡 永左衛門…………… 22

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝…………… 11

新入会員紹介

…………… 21

史跡巡り報告・小田原早川上水

…………… 11

第十三回史談会セミナー報告

…………… 27

第十四回史談会セミナー予告

…………… 21

小田原史談会平成二十八年度

総会・講演会報告…………… 26

第三回歴史団体

合同展示会報告…………… 27

特別賛助会員

…………… 28

落穂集

…………… 28



した。その度に祖父についていくわけ。ごほうびが目当てでしたけど。蔦屋の澤田さんの奥さんも十年ぐらいまではやっておられました。

お弟子さんたちの発表会などに子供を花に添えるのですね。時々ついて行って、仕舞やってみようか、ということになり曲を決めて舞うわけです。意味わからなくてもね。

南町の静山荘さんに舞台があって、望月軍四郎さんの未亡人が住んでいらした。そこにいつも先生がみえるんで、何人か集まりお稽古しました。

私は殆ど静山荘さんのお稽古場で、謡曲と仕舞の両方をお稽古しました。高校終わってそこに行つて、軍四郎さんの未亡人があのころですから二〇三高地の髪形で怖くてね。子方を大分やりました。

軍四郎さんの未亡人は明治の人ですからすごく厳しくて勉強になりました。その時小田原に来てらしたのは島澤啓次先生（家元観世左近の一番弟子）なんです。

大学は東京芸大邦楽部能楽科を受けたのですが、洋楽をやつてなかったので楽譜が読めなくて失敗したの。それで落とされたら、島澤啓次先生が「ウチへ来

ちゃえばいいんだよ」とおっしゃってくださいました。

それで私、高校出てから島澤先生の内弟子として通ったわけですよ。女性の内弟子第一号でした。祖父の後を継いできちんとやるんなら、遊びじゃなくて本気になってお免状を家元からいただくようにしなくてはという事です。島澤先生はこの頃六十代でした。

島澤先生の家が芝白金にあつて、そこへ小田原から通つて行つたんですよ。朝一番の電車に乗つて、夜は一番遅い電車で帰つてきました。十八から十九の時でした。先生の家でお弟子さんたちに教えているのを見聞きしながら全部覚えるのよ。免状を貰うまで毎日通つてましたよ。本当は内弟子さんたちは住み込みなんです、私、女性なので何かあると困るからということから、通えるだけ通つてごらん、ということ。

先生のところには色々な方がみえていた。面白かったのは凄いい元氣なおばあちゃんがいらしたの。北杜夫のお母さんの斎藤輝子さん。この人、斎藤茂吉の奥さん。面白い奥さんで、TPOで人見てキュキュッと変えられるから凄く楽しくてね。私たちには私たちが用の話をして下さるし、出る所に出れば「さようござ

います。ごきげんよう」っておっしゃるし、「南極行つてくるからお土産何がいい」「何がいいよ」南極に何あるか知らないわよ」って。楽しく可愛がつてもらいました。

前は「準師範」という資格があつたんですよ。私は二十一才で取得しました。

薪能は昭和五十八年（一九八三）に第一回目をやつたんです。それは当時教育長の譲原嘉市さんが第一声を挙げて、それで譲原さんと中井市長が、鎌倉の能楽師の中森晶三さんに頼みましようとなりました。

中森さんは鎌倉の薪能をたちあげた方で、その興業が上手でした。中森さんは鎌倉で活動されて平塚や茅ヶ崎も手がけているので、役所は中森さんにお願ひしてしまつたのです。

第一回目は、

当日に雨が降つたから市民会館でやつたの。市民会館で中井市長が「中森さんに」来年もお願いしますね」って言われたのね。それで、たまに次の年に小

沢良明さんが市議会議長だったので、中井市長のところへ小沢さんに一緒に行つていただいて、「申し訳ないが、第一回の経過の約束は（次回より小田原の謡曲連合の人がお世話になっていて先生にお願いする）」ということでしたので約束を守つてください」と申し入れました。

第一回のプログラムが、小田原にちなんだ曲をということだ「小袖曾我」、そしてポピュラーな「羽衣」。当日は抽選でようやく入場出来るという状況で大盛況でした。

二回目は、この頃小田原には観世元昭（家元の弟）、観世鍔之丞（分家）両先生のお弟子さんが沢山おりました。私の師である元昭先生に全部お願いしました。

その前に「予算はこれなんです、やっていただけですか」という前交渉をして、「やるよ、やってあげるよ。みんなの為だ

「からね」ってご返事いただいて、あとはお任せしますから番組を決めて下さいということ、全部やってくださいました。

この催しをする時は「申し合わせ」といって、必ず前々日ぐらゐに東京の舞台で合わせるんです。今考えると、二度とお呼び出来ないうまいメンバーでした。

嬉しかったけれど草臥れた。若かったから出来たんですね。それから元昭・鍔之丞両先生が交代で二十七回まで開催しました。

### 「北條」の復曲

薪能で「北條」を上演したのは第八回（平成二年）です。

「北條」は石井富之助さんが『謡曲全集』から見つけたんですよ。しかし、石井さんが探したものは文章だけしかなくて、復曲は観世元昭先生です。元昭先生が「節付け」（ゴマ点）から「型付け」（朱入れ）まで仕上げてくださいました。お囃子はお囃子方にお願いました。

そして最後のところに「負けいくさ」だからと、祝言を入れてくれたのよ。

前は洋、後は温泉の山續く、

小田原城下彌栄に、

栄ふる事こそめでたけれ

\*史談再録・石井富之助「小田原叢談四十三、小田原と謡曲」参照

### 仕分けの対象になった

薪能が中止になったのは平成二十二年（二〇一〇）で、小田原でもあの頃「仕分け」がありましたね。二十一年度の小田原市の事業仕分けで、観光協会への補助事業が「要改善」となったのよ。話があるからって市と観光協会から三人ぐらいでみえて、「なんのお話？」って言ったら、「今回の薪能は中止になりました」という事。「なに？赤字になっちゃうから？」って言ったら、

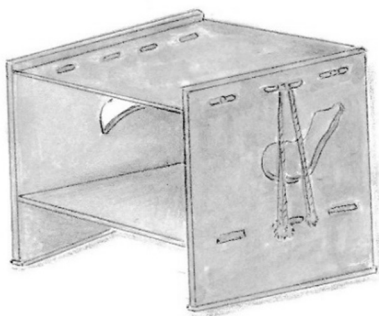
「それもあるし、市の方もお金が多くなって、協会のほうでOKしないから」ということで、だから中身は全然考えてないのね。本気で小田原の文化、城下町の薪能を考えてない。続けることに大変な意義があると思うのですが、古典芸能のお客は年配者や数奇人に限られてしまい、観光事業はもっと幅広くお客さんをお呼びしたいですね。

これ途切れちゃったら、また準備し直して二度目やるの大変ですよ。出演料だって、途切れたら倍じゃ出来ません。平成二十一年まで二十七回続けているの

で演者さんにもご無理をお願いし通して来ましたのに、とても残念です。演者さんは、「もう小田原はこれしか出せないんだな」って受けて下さっていたんです。その後文化政策課の方から「今後復活させるとなると、どの程度の予算なのでしょうか」と聞かれ、「この時はこれこれでしたよ」と言ったら、「えっ、そんなに安くやってたんですか！」とびっくりしてました。「今その倍だつて出来ないだろう」と言ったら、「そうでしょ。だから一度切れちゃうとこうなるんですよ」と言っただけです。

### 瓢箪のように絞って抑えて

弟子入りする人には「鶴亀」で発声練習するんです。「おなかの底から声を出して！」「本を見ないでいいから、それー」と言っ



やいけない」「絞って、抑えて」と言います。

曲によって、道行きで春の長閑な風景を謡うときはゆつたりと、今日はこんな天気がいいと謡うときは明るくと、情景説明など役を演じ分けるには十年ではねえ。

観世の見台の右側には瓢箪の切抜きがあるんですよ。あの瓢箪の先が声を出す口で、大きく膨らんだところがおなかですよ。声を全部出してはいけない、調整するんです。全部出すとオラウータンの叫び声になる。見台の左側の月は盃で、右の瓢箪はお銚子ってことなのね。

むかしは、玄人になるには寒稽古やりました。二百何曲を覚えなくてはならないから、何曲でも謡うんです。

### 一座の建立

お能って分業なんです。舞う人と謡が同じだけで、お囃子方、笛、鼓、太鼓方も独立で、それが集まって座が出来て一つの舞台をつくるのよ。

台本に朱を入れてあるから、演じる人は謡の本に書き添えていくの。それが「型付け」で、自分の台本に書いていく。

「後見」は全部を把握していて、演者がことばを忘れたら声を出して補ったり、演者が不慮の際

には即座に代役を引き継いだりします。

謡は文章の解釈が難しいから、理解して今の子に教えるってのは難しい。どういう意味ですかと訊かれても、万葉集や源氏物語などが入ってるから古典から勉強しませんとね。

世阿弥ってすごいですよ。それに、世阿弥の言葉はどれも味わい深くて奥がある。「命には終りあり、能には果てあるべからず」(花鏡)、「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」(花伝書)って、すごいことよね。だから、果てがないのよ。

能と女性

女の人が出てくるのでも、普通の人と天女とは違うのよ。そして、貴人が遊女に変身するときには気分の切り換えができないといけない。

面をつけて舞台でお能を舞うのは、やっぱりとりあえず男社会で、お能の曲目によっては女性禁止って曲があるんですよ。

今は女性も面をつけて舞うこともしますよ。ただ認めてくださるかどうかですよ。芸大があつて女の子でも入れるし、そこで修行し一人前になって卒業すればそういう舞台に出られるじゃないですかね。

お能は面にしろ装束にしろ男

用だから大きい。ですから女の人は小さく工夫して着けるのですが、装束付けが大変苦労します。

面は一点しか見えないんですよ。だから、能の舞台には梯子があるんですが、その梯子や四本柱などを目印にして演じます。新能の時には篝火の明かりを目印にしたりします。

お能を観るときは

「いよいよ始まるな」ってね。客席で謡本を持ってお能を観てますと、みんなが同じ頁で本をめくるので、サラサラって音がするんですよ。演者はそれが気になるの。観る人はある程度筋書きを頭に入れて行って、本は見ないほうがいいですね。

お能は幕がない。幕が下りない。本来は最後の演者が舞台を去るまで拍手をしてはいけないの。アンコールは絶対ない。「固く守って」が難しい

今、お弟子さんたちが少なくて、お弟子さんを教えて食べていかれないから、男の人も専業では出来ません。だから、小田原で男の人たちが何人か教えていますけど、もうこれは趣味で教える他ないじゃないですか。家元の家系とか、家元の直系の弟

子だったら後を継がなくてはいけないことになるけれど、そういう人は小田原にいませんから。

みんな本業じゃないです。女の人たちでもそうよね。各連合会で何人か集まって楽しんでるのです。昔はこれが二十団体ぐらいあったんですよ。

とにかくこの世界、一朝一夕で出来ませんからねえ。それがすごく菌痒いのね。

お茶でもお花でも日本舞踊でも、一番困っているのは後継者。だけど、本質を失って人数が増えても、お行儀は悪い、節度がないでは困りますし。

それでなくても皆さん、昨今、足は悪い腰は悪いで、なかなかきちんと正座してということが出来なくなってきました。そういう厳しさも無くなってきました。こちら「足が痛いんだから少しいいますよ」って言います。もうその方たちはもう八十過ぎて

狂言の山本東次郎さんは、「乱れて盛んになるより、むしろ固く守って滅びよ」って、御自分の息子さんたちに継いでいく時にそうおっしゃってらしたそうです。



「羽衣」舞う悦子さん 観謡会 25 周年記念大会にて (平成 4 年 5 月 小田原市民会館)

あの世でも能の会

きょうの話に出た人たちは殆どあの世に逝って、あの世できつといい能の会を催していると思います。元昭先生が亡くなった後に、遺書じゃないけど、便箋に書いてあるのが出てきました。共演者で既に亡くなった方々の名前(先代家元、兄弟弟子の方、ご自分より早世された息子さん)が書き連ねてあり、胸がいつぱいになりました。「向うへ逝ったらこういうお能の番組を作って向うの世界でお能をやりたい」って書いてあったのよ。

(最後に一曲謡ってもらふことになってました) それはないよねえ。(聞き書き 青木良一)

(平成二十八年三月十二日)

## 【資料1】

中津川氏師範披露素謡會(昭和九年三月十一日開催)

## ○案内状

「陳者當地方は往昔より謡曲の趣味深く各流中殊に觀世流尤も弘く行はれ爾來年とともに益々其旺盛を來たし今日に至り候茲に本會々員中津川吉藏氏は斯道の大家たる小澤良輔先生小澤健雄先生に師事し研鑽を重ねる多年其技彌々進捗圓熟せられ爰に於てか今回同先生の推奨に依り宗家より師範たるの認許を受けらるゝ事と相成候就而は來る三月十一日宗家觀世左近先生、梅若万三郎先生、小澤良輔先生を始め其他諸先生を招聘し左記番組の通り之が披露會を開催仕候間何卒同好の士御誘引の上御來會の榮を賜はり度偏に奉懇願候」日時 昭和九年三月十一日(日)会場 箱根塔ノ澤 環翠樓 鈴木會費 金二円五十錢

「昭和九年春

中津川氏師範披露素謡會記録

廉謡會」

## ○日誌

三月拾日

いよいよ明日に迫る。先筈準備の要あり、午後二時江良氏宅に集合。岩田、瀬戸、五十嵐、村野、奥津、江島六人環翠に向けて出発す。函根の鈴木氏、小田、太田氏参加し、午後八時に至る迄懸命に準備

にかかると。諸々に表示のビラ数多く□□に多忙なり。終つて、遅れて來りたる龜山先生、中津川、奥津氏を加へて夕食。龜山先生、中津川、江島宿泊す。

三月拾一日

餘寒尚厳きも引続き快晴なり。朝八時半開始と□□忙しき限りなり。幸各役員精勵に部処につき豫定の時間に始る事を待たり。番組の進行すこぶる順調にて時間余裕綽々たるものあり。受付、会員休憩、食堂、会場ごとく準備完全。來會者聊の不平を聞かず。松平、高橋先生早朝に小沢両先生並びに島沢、武田先生拾時頃、宗家、萬三郎先生、二時半に御着あり。臨時参加として仕舞二番を加へ素人の仕舞全部終了したのが拾二時頃なり。依つて茲に昼食の休憩時充分取り得て一時半より廉謡會代表方の独吟を再會す。終て松岡氏主催者を代表して中津川氏と共に挨拶をなす。番外全部の終了午後五時二十分。参会者別記の通り。大体豫定に達す。残務を處理し午後七時より晚餐會稀に見る盛會にて得意の余興噴出。九時半無事散會。

○参会者 三八八八

主催者側氏名(当日役割)

中津川吉藏、奥津惣太郎(総務)、松岡彰吉(総務)、岩下鉦之助(顧問)、江良本三郎(顧問)、吉田義生(会計係)、三宅信次郎(会場進行)、瀬戸澄(会計係)、岡部常輔(会員

接待)、井上嘉七(会員接待)、江島平八(幹事長)、早川勝美(会場進行)、興津壽續(記録)、江良福子(先生接待)、五十嵐登(受付)、村野虎五郎(受付)、石村幸作(会計)、堀江林造(受付)、岩田忠介(食堂)、浜野泉吉(会員接待)、津田音次郎(会場進行)、山田要之助(受付)

## 【資料2】

梅若流能楽大會(小田原町緑風會主催、昭和十年五月十二日開催)

○賛助者氏名(順不同)

新開滝觀、伊藤邦憲、鈴木英雄、小西尚三郎、伊藤彌吉、中田壽一郎、草山惇造、飯沼相三郎、井上登次郎、池田昌久、本多成二、興津壽續、田中庄吉、添田伝次郎、中津川吉藏、外郎藤右衛門、江良本三郎、澤地波右衛門、芹澤勝藏、平井梅太郎、橋川保、平川松太郎、益田信世、江島平八、川井安房、松岡彰吉、小峯徳次郎、井上嘉吉、岩下鉦之助、早川勝美、奥津惣太郎、吉田義生、田口為八、津田音次郎、中山助八、小菅幸吉、役泰雅、篠窪行雄、清水專吉郎、平田勝治

小田原緑風會事務所

小田原町萬年四丁目

高井作次郎方

## 【資料3】

中津川吉藏師還曆祝賀素謡會(昭和二十四年四月二十四日開催)

○案内状

「小田原市生え抜きの唯一の觀世流師範家として永年流儀の普及に精進されて來た中津川吉藏師當年目出度還曆の年を迎へられたので吾々門下發起となり島澤啓次先生、清水要之助先生、武田太加志先生、其他諸先生方の御來援を得且又同好諸兄弟の絶大なる御賛助に依りまして左記番組の通り其祝賀會を催す事に致しました。」

於 湯本三味莊

主催 小田原觀謡會

## 【資料4】

中津川吉藏師範拜命滿二十年記念素謡會(昭和二十八年八月二十三日開催)

## ○案内状

「今年四五月頃の春の好季節に催ふしたいと思つてゐた春の此會が遂に暑い夏の八月に持込んでしまいました併し偶然と云ひませうか私が先代宗家觀世左近先生から師範を拜命致しましたのが昭和八年の七月ですから本當の滿二十ヶ年に相當する事になりました處で此經過年度の中に支那事變、太平洋戦争と云ふ大不祥事があつて此期間には私達師範仲間殆ど休業状態の止むなき有様でしたが幸ひ私は其中で陸軍々囑として陸軍病院や軍需工場等に稽古を續けてどうやら休まずに御奉公は出來ましたので完全な滿二十年記念である事を微笑ましく思ひつゝ、觀世お家元並

びに島澤先生を始め其他諸先生に御来援を願ひ且又地元の先生方にも御助力願つて此記念会を催ふ事致しましたお暑さの折柄何卒お浴衣掛でお気軽にお出掛下さるよう御案内申し上げます。」

主催 小田原観謡會  
於 箱根湯本三味荘舞台

【資料 5】

祝 江島平八氏快気 夏季素謡大会

（昭和四十年七月一日開催）

○御挨拶

「偕て私共親愛の江島平八氏事今春急性肺炎で臥床中急変して一時は同志も憂慮いたしました。が御家族の心暖かい看護と諸先生方の御手厚い御手当の効果ありまして万死に一生を得られ最近では全快され従来通り亀山先生に師事を受けられるようになりました。」

会員一同この喜びを御同好の方々へ御領ち申上げる意味で新装整い開館されました市民会館本館大会議室を借用し亀山先生茲に御同門の諸先生方を御迎へして江島平八氏快気祝いを兼ねて夏季素謡会を催すことになりました。」

主催 小田原素謡會  
場所 小田原市民会館本館三階

徒然なるままに

— 忘れられた地名（一） —  
「酒匂鍛冶分」

杉山 虔一

これから百話を目指して連載を続けさせて頂く、筆者の杉山です。これから書くことは史談会の皆様からは当然知っていると云われる様な話だと考えています。なぜならば、筆者は歴史を勉強してきた者ではなく、ただ常識の範囲で書き綴るからです。

会員の皆様は知識豊富な方々ばかりでしょうから、この様な記事を是非投稿していただき、二百、三百話になればと考えています。そして、子供達に語り継げたらと考えています。

『新編相模國風土記稿』（大日本地誌大系新編相模國風土記稿、以下「風土記」と記す）の足柄下郡酒匂村の次に、「酒匂鍛冶分」があります。短いので全文を引用しますと

「酒匂村より分れし地なり、（元禄の改に始て村名を載す、）高纜（わすか）に四十石餘にて、四域彼村に包まれ、民戸も錯雑して一村の如し、もと鍛工四十二軒餘住居せしかば地名となれり、今は民戸六十二軒の内鍛工を業とする者、

纜に七戸のみなり、江戸の行程、領主検知等渾（すべ）て酒匂村に異ならず、」

この文章から、「酒匂鍛冶分」と言われるには、六十二軒の民戸が（ちなみに酒匂村全体は、百十八です）周囲を酒匂村に囲まれ、まとまって存在したのか、また、鍛工が四十二軒から七戸に激減した理由は、と疑問は尽きません。先日（三月二十六日）に小田原市文化財課が実施した「酒匂川左岸の遺跡」見学会では、国道一号线の保健センター入口から酒匂神社に向かう道路に面した発掘現場（酒匂二丁目二四〇一七）から推定一・八トンもの鉄滓を、発掘したとのこと。

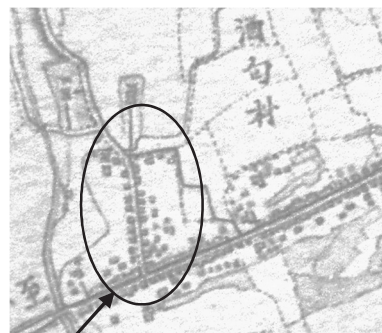
一軒の鍛冶がこの様な量の鉄滓を残すには何年くらいかかったのか、はたまた何軒かの鍛冶がその場所に鉄滓をまとめて廃棄したものか、発掘例の積み重ねを期待したいものです。

又、この道に四十二軒ないし六十二軒が、軒を並べていたのでしょうか。道長を現在の地図

（平成十八年編集 小田原二）で調べると二百m前後で、六十二軒が均一に存在したとすれば、平均一軒当たり六・四mくらいの間口（三間半）となり、この時代の町戸としては間口が広く、この道の両側が、酒匂鍛冶分と言う事になるのでしょうか。いつ

の間にか地名も場所も忘れられたのですね。

ちなみに、明治十五年に測量された、酒匂村の拡大図（国土地理院所蔵 神奈川県相模國足柄下郡酒匂村外三村）を左に掲載します。



この地域が「酒匂鍛冶分」か？

また、鉄滓の写真（小田原市教育委員会所蔵）も左に掲載します。ところで、小田原市文化財課は、毎年三月の最終土曜日に「見学会」を実施しています。歴史は日々変化しますから皆様が、是非参加しては如何ですか。最新の情報が分かりま

すよ。  
注 サカワの漢字表記ですが、「風土記」に関するものは「酒匂」、他は「酒匂」を使用しました。



## 史談再録

五二号（一九六八年十月）

## 明治百年小田原の謡曲界懐古

清水専吉郎

小田原藩時代謡曲に携はれし人に十字町瓦長屋今の南町天神社前通りの北側に古田、山下、近藤、三氏とお堀端通り幸田門寄りの東側に藤沢氏あり、此四氏が観世流謡曲の師匠にて藩より手当を受けし由古老より聞き及べり。私の父清水伊兵衛も此藤沢氏に謡を習いたり。明治三十年観世流廿三世家元観世清廉師が小田原に來り鷗鳴館と琴清館とにて謡会を催せり、それより小沢良輔師が中田寿一郎氏方へ來られ廉謡会を創立せり。

中世小田原にての謡曲界明治、大正時代有名なりし人に、西岡遼明、神原富文、益田勘左工門、鈴木英達、清水伊兵衛、松本栄太郎、長谷川弥三郎、中田寿一郎、江良本三郎、石川仙助、磯部伯治、和田弥太郎、田口為八、本多成二、江島平八、高井作次郎、染本染太郎、篠窪行雄、岩下鉦之助、の諸氏がその道に達者なりき。

大正年代より当時斯界に第一人者とも云うべき中田寿一郎氏は美声の小沢良輔師に就き蘊蓄を極められ瓢声会を創立して盛大なりき。中田氏は弁護士後に小田原町長の繁職の中を通じて実際に能く子弟を師道せられたりき、中田氏は東京へ裁判所用事に上京の時折に私の父と俱に観世清廉師家の処へ赴き師事せられたり、大正年代より私も瓢声会へ入り中田先生に、奥津惣太郎氏、中津川吉蔵氏と共に懇切に教を受けたり、奥津惣太郎氏は小田原に最初の観世流師範となられ次に中津川吉蔵氏が師範となられ、昭和廿六年一月に至り清水専吉郎名譽師範となれり。

一方梅若流は大正より昭和の初めまで、鈴木新太郎、勇次郎、亥三郎各師が順次小田原へ出張せられ、高井作次郎氏を中心に梅鈴会と稱し之亦盛んになれり。他方石川仙助氏の謡教室もあり、板橋なる益田孝男爵邸に梅若萬三郎師來られ其御弟子、辰雄、春雄、萬佐世、三師交互に來られ、その折に其教えを受けたる人々に私も加わり、昭和三年十月重習砧の免状を十三世梅若萬三郎師より受けたる事は、同じく既に大正四年三月九番習免状を岩田忠介氏が受けられしものと照合し書式、印形全く同一にて、今日よりすれば誠に珍重のものなり。

大正十二年関東大震災後数年と昭和十四年より十六年大東亜戦争後数年八ヶ年位は中絶し、謡曲界全般は聞き及ぶ明治維新当時の謡曲

界頽滅の状態に梅若実が辛うじて支えし如く全く下火となりし、空白時期の資料は無けれど其後の当小田原謡曲界は復興と共に盛んなり詳細の番組資料存す。観世鍔之亟家にて師範となれる星崎静夫氏が、昭和廿二年鍔之亟師を古清水旅館に案内して小田原にての稽古を甫じむ後に小田原鍔仙会を創設しそれより此地方は追々元に復し、斯界隆盛となれり。

小田原地方の謡曲には井口丑二原作齊藤香村再調せし二宮を觀世喜之師之れを節付し、昭和十六年四月十六日二宮神社にて觀世喜之、大館省三、清水専吉郎三師此地にて社殿に初めて披露し謳はる。謡曲国府津は国府津真楽寺に古存せる版木を發見し、親鸞上人作として寺主平氏より乞はれて東海俊美、清水専吉郎両氏にて之を版木より印刷し読み且つ謡ひ、文字節付を其章通り写書して謡本となし、昭和三十五年四月廿五日謄写版本となせり。

昭和廿五年十一月小田原文化祭に、二宮、国府津、小袖曾我、夜討曾我と此地方に因める曲の謡会を難波明氏の斡旋に依り、史談会催しにて此年より文化祭に加はれり、翌廿六年十一月五日小田原文化祭にて大会を本町小学校講堂に行へり。之より翌廿七年文化祭の第十回として、以後毎年文化祭に謡会を組入る、事となれり。

城下町として小田原は謡曲界隆盛に諸会三十を数ふる程にて、今はその師範の人十八名現存し、明治大正より今日まで半世紀餘の番組百五十枚保存しあり、湮滅を恐れて他日小田原謡曲史料として編纂せんと存念す。



前列左：清水専吉郎、中央：中津川吉蔵

右：望月軍四郎夫人

(原文にはないが中津川さん提供)



史談再録

一九一号（二〇〇二年十月）

# 小田原叢談 (四十三)

## 石井富之助

### 小田原と謡曲

小田原は謡曲のななかさかんなところである。教育委員会の印刷した文化団体名簿を見ると、小田原謡曲連合会というの

があつて、二十九団体（昭和五十五年頃）がこれに所属している。

会員数はどのくらいか聞いて見たら六百名余ということであつた

が、中野敬次郎氏によれば、それは正式に登録されている人の

数で、それ以外の人を加えればおそらく二千を越すのではない

かということだつた。

わたしはずっと以前に小田原の歌謡にどんなものがあるか調べたことがあるが、小田原に関

係のある謡曲が意外に多いのにびっくりした。その中には師範

でもご存じないものがあると思うので、ここに紹介しておこう。

まず第一に最も多いのは曾我物である。わたしの持っている『謡曲三百五十番集』では八種

類しか数えることができないが、

富士高等女学校の先生であつた宇野量介氏の『曾我伝説の展開について』には十四番が挙げられている。

すなわち、

切兼曾我、夜討曾我、調伏曾我、元服曾我、赤沢曾我、追懸曾我、御坊曾我、禪師曾我、小袖曾我、伏木曾我、十番斬

虎送大磯、和田酒盛

『謡曲三百五十番集』の解説（野々村戒三）によれば、「謡曲の曲数は各流派によつて違いがあり、また時代によつて曲目に入れられたり廃止されていたりして一定していない。全部合わせる

ると千曲以上にもなるが、それらのすべてを載せることは不可能なのでここには各流派の現行曲だけを収めることとした」とある。前記曲名のうち傍線を付したものがそれで、これらは現在でもうたわれているといつてよいのである。

いづれにしても、一つの事件がこんなにいるいろ作られている例は外にはなく、それだけ曾我の仇討は世の耳目を集めていたといつてよいであろう。

小田原にはこのほかに蓮如上人作「国府津」という謡曲がある。国府津の真楽寺は親鸞聖人が七か年の間ここに居住して諸人を教化された霊場として知られ、今もなお聖人が指で十八字の名号を書いたら、それが自然にくぼんだと伝えられる帰命石といふ石を宝物としている。

この謡曲は一向上人が国府津の霊場をたずね、亡き聖人から仏法の教えを受けるといふ筋のものである。ツレは姥、シテは漁翁、後シテ親鸞聖人ワキ旅僧（一向上人）となつてゐる。

源頼朝の石橋山の挙兵を扱つたものに「七騎落」がある。

石橋山の合戦で敗北した頼朝がひとまず安房上総へ落ちること

にきめ、従うものはと聞くと七騎だという。頼朝を加えると八騎になる。それでは不吉なので一騎を船から下ろすことになつたが、だれも進んで下りる者がいない。結局親子二人乗つて

いるといふので、土肥実平はその子遠平を敵中に残して舟出す。時が経つて、一そこの兵船が近づき、これは和田義盛がお供

したいと思つて追つてきたといひ、引出物として戦場から助けてきた遠平を引きあわせたので、一同めでたし・めでたしとばかり、喜びの酒宴を張るといふものである。

また新曲として「二宮」がある。原作井口丑二、改作齊藤香村、節付観世喜之、狂言節付山本東次郎、筆写草山惇造で報徳二宮神社から出版されている。井口丑二は往年の報徳研究者、改作の齊藤香村は能楽書院の経営者で、ホトトギス派の俳人でもあつた。発行年月日がしるされて

いないのはつきりしたことはないが、図書館への寄贈が昭和十六年四月十四日になつて

いるので、そのころに作られたものである。ちなみに同年九月四日神奈川県尊徳会が栢山で

発会式を挙げてゐるが、あるいはこれと関連があるのかも知れない。この謡は毎年の尊徳祭に

うたわれているからご存じの方も少なくないと思う。

つい先日、なんとということもなしに『謡曲三百五十番集』の目次を見ていたら「番外謡曲五十一番」の中に「北条」といふのが

あるのに目がとまった。試みに中を聞いて読んでみたら、これがなんと北条氏政を題材にとつたものであつたのには驚いた。

## 一句鑑賞

京都五山の僧が東国の様子を見物しようと旅立ち、箱根を越え、小田原を過ぎて大山のふもとの辻堂にやどる。そこへ老翁が現れて物語をするが、やがて僧はこのあたりはかつて北条氏の治めたところだが、北条氏政父子が滅亡した由来を語ってくれという。老翁が合戦のありさまを詳しく話すと、古いことをこんなにこまごまと話されるところをみると、さだめし由緒のある人とお見受けした、お名をあかされよというので、実は北条氏政の亡霊であると名乗り、それからなお、合戦の模様から切腹までを物語り、われも御僧の教化のおかげで解脱することができた喜び。

こういう筋のものである。先

## 天守より松明の火や能の秋 鳥海壯六

俳誌、鷹同人の作者。小田原城天守閣の下で行われる新能は秋の伝統行事のひとつ。その荘厳な情景は能を知らない者でも何となく、幽玄の世界に引きこまれるような感じを受けるのである。

右の句は、松明の火に天守がライトアップされたように浮上する光景が、流暢な謡曲の調べに乗って、能楽師の所作までが目に見えるようである。下五の能の秋が見事に定着して、作者の巧みな技量がうかがえる。(剣持芳枝)



カット 内田美枝子

日、小田中の第十九回クラス会の時、今は謡曲の師範をしている瀬戸祥雄君にあったので、この話をして知っていたのかと聞いた。へえそんな謡があるのかと驚いていた。おそらくこれを知っている人はいないように考へるが、とするといいもかけぬ拾い物であったといつてよい。

小田原に関係のある謡曲はま

だこのほかにもあるかも知れないが、ちよつと調べただけでもこんなにくささんある。別にどうということもないけれど、こんな謡曲があることを知っているだけでも、何か心が豊かになつたような気がするではないか。それにひきかえ小田原の謡曲史となると皆目わかつていない。前記齊藤香村氏は戦時中板橋に住んでいた。わたしとは俳句を通じて親しい間柄であったが、図書館へやってくるまで小田原謡曲史を調べて見ようといったことがあった。また清水専吉郎氏も研究してみたいといつていた。しかし、二人ともそれほど研究が進んだとも思えないうちになくなられてしまった。

小田原の謡曲史の資料はまったく少ないようである。

わたしの知っているものとしては北条五代記に次のような記事がある。

天正十四年三月二十二日松原明神の御前の庭で四座の太夫が御法楽の能七番を行った。納めには四座の太夫が四人出て泰平楽を舞い納めた。

四座の太夫というからには観世、宝生、金春、金剛の四座にちがいないと思うが、さてその太夫が何という名の人かまるつきりわからない。ただ宝生だけは同じ時期のものとして一つの資

料がある。

ある年、北条氏直が能の師範にとつて宝生太夫を招かれたので、重勝は持病によって隠居すると申し立て、小田原に下つて氏直に能を指南した。元龜三年の頃、重勝は小田原でなくなつた。

これは『観氏家譜』の中にあるが、重勝の養父で、俗に鼻高宝生と呼ばれた将監一閑も小田原北条の殊遇を受け、還俗して服部四郎左衛門勝政と称していた、という。

わたしの知っている資料はこれくらいのものである。

北条家には舞太夫として天十郎太夫や桐座の先祖の大橋善政など幸若舞系統の太夫がいた。また大久保忠隣を頼つてきて、後に金山奉行になった大久保石見守は甲斐の国の能楽師であったことなど話題はなくてもないが、北条氏から大久保氏の時代を通じて能楽謡曲のこととなるとまるでわかつていない。小田原文化の一環としてどなたか研究をしていただけるとありがたいと思うわけである。

編者註

本号の九頁、十頁は第一九一号をそのまま再録しました。

## 旅のつれづれ俳句日記

劍持芳枝

例年より一週間早く梅雨入りした年の、六月のある日、親しい友人の旅行会に誘われ、早朝小田原駅を出発した。大阪で博多行きの新幹線ひかりに乗り換え広島へ到着、平和公園や原爆資料館を見学した。戦争の無惨さをひしひしと感じる思いだった。宮島口から船で十分ぐらい揺られ安芸の宮島へ、日本三景のひとつとして瀬戸内海に浮かぶ神秘の島、美しい風景に見とれるばかりだった。神鹿の人なつこい姿も可愛かった。朱塗りの鮮やかな巖島神社に参拝のあと、旅館「岩惣」へ着き、友人と私は離れの部屋に落ち着いた。隣りには貴賓室があり、先月は秋篠宮ご夫妻がお泊まりになったそう。宴会場では大変なご馳走だった。

ぐつぐつとよく眠れた朝の目覚めは快調で、身仕度し朝食後八時出発、歩いて船着場まで、宮島口では観光バスが待っていた。先ず岩国錦帯橋へ、日本三大奇橋の一つで、よく写真などでは見えていたが、目の前で見る素晴らしい風景は何時までも眺めていたい心境だった。昼頃に津和野に着き昼食をいただいた。森鷗外の旧宅や民俗資料館「養老館」も見学し、津和野名物鯉の遊泳する姿を眺め、土産物店で源氏巻を買った。

## 窯元の多き町並み竹の秋

津和野から一時間半ばかりで城下町萩に着いた。風情漂う白壁の風景、東光寺や松下村塾も幕末時を偲ぶにはゆっくりと見学したいところだった。松陰神社にもお参り出来てよかった。萩から長門湯本温泉に着いた。今晚の泊まりは大谷山荘で、立派な構えの旅館だった。宴会の時の舞台での石見神楽が実に見事で素晴らしかった。翌朝は八時出発、少し風もあり雨が降りそうな空模様だった。一時間ばかりで秋吉台を通り秋芳洞へと向かった。入口から歩き進むと百枚皿、傘づくし、黄金柱、くらげの滝のほり等、自然が生み出した鍾乳洞の景観に感動の連続だった。大内義弘の菩提寺である瑠璃光寺は、五重塔が素晴らしかった。雪舟で有名な常楽寺を見学し、その場のレストランで昼食だった。午後一時すぎには小郡に着きここでバスガイドさんとお別れした。大阪から新幹線を乗り換え小田原へと向かった。

## 白南風や海辺の町のなまこ壁

今回の旅は美しい日本の優雅な名所旧跡を見物出来、心から幸せな旅であったと一人胸を撫でおろしている私であった。

第十三回小田原史談会セミナー  
「小田原の歴史を掘る」要旨

(小田原の歴史を掘る・第五回) 平成二十八年五月二十八日

## 「北条時代の小田原城と御用米曲輪」

講師 渡辺 千尋氏 (小田原市文化財課)

大森氏時代の城の遺構は見つかっていない。江戸時代の小田原城は平地部を中心に展開し、丘陵部に戦国時代の遺構が残された。

八幡山古郭 西曲輪で大規模な障子堀、石組みの井戸を検出した。本曲輪で埴輪が出土し、物見台が古墳であることが分かった。東曲輪で両側に石垣のある道路と思われる遺構を検出し、小田原合戦陣図に石垣が描かれており、小田原城に石垣があったと考えられる。

二之丸 住吉堀で前期大久保氏時代の不完全な障子堀、その下に北条氏時代の障子堀が検出され、江戸時代の堀と北条氏時代の堀とは少しずれていた。

三之丸 山本内蔵邸跡の幸田口門土塁の下から障子堀を検出し、三之丸堀に跨る居館があった。近世と違う場所に中世の堀を検出しており、小田原城は同心円状に拡大したと言われているが、単純に言えない。

大外郭 傳肇寺西でほぼ完全な障子堀、土塁を検出した。

御用米曲輪 小田原城周辺で初めて礎石建物跡と全国的に類を見ない切石を用いた庭園・池を検出した。池畔の建物跡が検出され、儀式用などカワラケ、五輪塔などの石を加工した切石が出土した。石を集積・加工したと推定される遺跡、これが山角町で検出された。

この曲輪は戦国期小田原城の中心のひとつで、よく分かっているかかった北条時代の小田原城の姿が予想を超えて残っていた。そのため、この曲輪は江戸時代の御用米曲輪として、そして戦国時代の小田原城中心部のひとつとして整備される。

(山口 記)



◎此御しやかのしゆりをしたてゝくりきによつてとを山かいのかみふちはらのつなかけか(遠山譜を按に、綱景は丹波守直景が子なり)いのちなかくまつたくしゆめうちやううん御まもり候て可被下候ことに、とを山かいのかみゆみやのめうかあつて、ほうちやうのうちやすのきよいよく(御前は氏康の妻室などをさせるか)ほうちやうのけんなんのきよいよく(北條幻庵は氏康の伯父)御まもり候て可被下候。又とを山かいのかみふちはらのつなかけか、うしろからまくらむねはらへおいて(追の義か、またはいつの寫し誤か)まはるおゝかのゝ(五字次にも見ゆ、病の名と聞えたれど、解得がたし)やまひをこゝくやきうしなはせ給ひて、ふくちうにやまひなくはらにわつらひなくかのよくかい申候て(九字讀得がたし、強ていはゞ、ものよくい申候て、とありしにやむひやうたつちやに御まもり候て可被下候。又とを山かいのかみか、かたのやまい御まもり候て可被下候)天ふん廿一ねんみつのへね八月きち日

○なむしやかにふつなむ六しよのかみく(五字上にも見ゆ、讀得がたし)やまひこゝくやきうしなはせ給候てあせかくやまいなく、しそんはんちやうに御まもり候て可被下候きうく(此下虫食)

○なむしやかにふつなむ六しよのかみく(遠山譜を按に、後に右衛門大夫といひし人なり)ゆみやのめうかあつていのちなかくまつたくあせかくやまいなく、ほうちやうのうちやすのきよいよくむひやうたつちやに御まもり可被下候。とを山かいのかみおなしくや六郎(此間虫食)ふうするかのをけんちやくをゝん人(十六字詳ならず、をゝん人は、をんかへの寫し誤にて、次の御かへは重複なるべきか)御かへし候てかいのかみや六郎おやこの身に、おはぬように御まもり候て可被下候

○なむしやかにふつなむ六しよのかみく(遠山譜を按に、後に右衛門大夫といひし人なり)とを山かいのかみおなしくとを山や六郎おやこのものゆみやのめうかあつて、いのちなかくまつたくに御まもりとを山かいのかみしそんはんちやうに御まもり可被下候

○なむしやかにふつなむ六しよのかみく(遠山譜を按に、後に右衛門大夫といひし人なり)かやうにしやかをそうりうし、たてまつるくりきによつてとを山かいのかみふちはらのつなかけか、いのちなかくむひやうたつちやに(此間虫食)きうきうによりつれう

○なむしやかにふつなむ六しよのかみく(遠山譜を按に、後に右衛門大夫といひし人なり)わか身たいらのまつくすか(九字誤あるべし讀得がたし。試にいはず、たいらは平にて此人の姓、まつくすは名ならむか)むねはらにわつらいなくあせかくやまい御なをし候て、むひやうたつちや、しそんはんちやうに御まもり候て、ま事にしに申さんときに身もやまず、かたきことなく、かなしきことなく、おゝちやうやうするように御まもり候て可被下候

天ふん廿一ねんみつのへね八月きち日 むさしのくにゑとのあるし とを山かいのかみ母

遠山家の願文 猿渡盛章著『新撰總社傳記考證』 (◎印・綱景願文、○印・まつくす願文)

くす」という名であつたらしい。上に示す『武藏總社大國魂神社史料第一輯』収載の「新撰總社傳記考證」である。

寛政七年(一七九五)、我が家(六所明神社)を改築した際、玄閑の天井に藏めた佛藏の台座の板二枚に書かれた願文を合せて漆で塗り固めてあつた。虫喰や消失した所もあるが何とか書写し、考証したという全文である。

ルビで読み方を示し、括弧内が願文の考証である。

天文二十一年八月、武藏国惣社の六所明神社(現大國魂神社)の釈迦像修造の際に、遠山綱景(まつくす嫡男)が武運長久と家内息災に主君北條氏康と御前(氏康夫人)、それに幻庵宗哲に覚えが良いことを願っている。北條家の実力者である氏康と幻庵は当然だが、氏康夫人(瑞溪院)を挙げてゐるのが注目される。母まつくすの助言であるうか。

とは言え、武將が主君夫人の覚えを願うのは極めて珍しい。戦国時代の女性は表に出ることは少ないと思われ勝ちだが、実際は当主夫人の発言権も相当なものであつたとの見解もある。

瑞溪院に政治力か?、何らかの期待があつたのであろう。

そうした意味でも、この銘文は貴重であり全文を示した。

「まつくす」の願文も、ほぼ同文に近いが、まず子息綱景の無病息災と子孫の繁昌を願ひ、続いて孫の弥六郎(隼人佐景久)に「弓矢の冥加(戦場の手柄)と、氏康の御意に叶うこと、綱景父子と子孫繁昌を繰り返し、最後に「我が身たいら(平)のまつくす」と記し、自らの病治癒と無病息災を願っている。「まつくす」は平姓であるという。

この後、「綱景の母は、丹波守直景が妻なり。丹波守はじめは四郎左衛門と云」と説明し、「珍しいものであるから仮名の間違いも、詞のくだくしいことも厭はず後世に残したく、もとのまゝに載せた」とある。

「詞のくだくしき」と記すように、同じような願ひが繰り返されているが、「まつくす」は持病も記し、心底切実に佛の加護を願っていたのであろう。

そして、傍註や所々の分註は、考証者猿渡盛章が考え記したとある。さらに遠山家と猿渡家とは縁があるとも記している。私は盛章の「後の世にも残れかし」に拍手を送りたい。

猿渡盛章は寛政二年(一七九〇)生まれの国学者で、三代続けて六所明神社神主でもあり、文久三年(一八六三)に他界している。

### 遠山綱景と嫡子景久

綱景は、天文十三年に連歌師谷宗牧を呼び、江戸城内で連歌の会を催した記録も残っている。

また、永禄元年(一五五八)の古河公方足利義氏の小田原城訪問時には、北條氏の五人の宿老の一人として松田盛秀らと義氏に拝礼を行い、この頃、江戸城東側の葛西城も与えられている。

豊島区池袋にある瑞鳳山祥雲寺(曹洞宗)の説明板は、次のように記している。

「祥雲寺は、後北条氏の重臣江戸城主遠山隼人正景久によつて、永禄七年(一五六四)に江戸城和田倉門内に、吉祥寺(太田道灌創建)の末寺として創建されたのが始まりで、開山は吉祥寺安充和尚である。当初は景久の室(北条上総介綱成の娘)の菩提所として法号にちなみ浄光院と称し、永禄七年に戦死した景久の法号から瑞鳳山浄光院と号した。天正十八年、後北条氏滅亡後遠山氏も退転し、暫く吉祥寺の隠居所となり、神田駿河台・小日向・金杉・小石川戸崎台と移転した。(中略)宝永六年、五代將軍徳川綱吉の死により、御台所が落飾して浄



写真 祥雲寺石碑と説明板  
(豊島区池袋)

光院殿と称したのに憚り瑞鳳山祥雲寺と改号した。当地への移転は明治三十九年である」

この隼人正景久は、遠山直景の嫡男綱景の嫡子で、多くは隼人佐と記しているが若くして戦死したため史料は極めて少なくこの説明文くらいである。

前記願文奉納十二年後の死去で祥雲寺建立の永禄七年、同じ江戸城代の太田康資(資高と浄心院の子)が離反、康資の救援に安房国の里見氏が出兵し第二次国府台合戦に発展した。

岩付城主(岩槻市)太田資正の誘いがあつたとは言え、娘婿(康資)の離反を見抜けなかった綱景と景久は戦死、願文奉納のまつくすの想いが偲ばれるが、彼女は存命していたのであろうか。

家督は三男で僧籍にいた政

景が還俗して継ぎ右衛門大夫・甲斐守を称す。隼人佐景久が江戸城代に就任した史料は見えないが、どこかの時点で綱景が景久に譲っていたとも考えられる。

考証は弥六郎を「後に右衛門大夫という人」政景」とあるがこの頃の政景は僧籍におり、弓矢の冥加が当らない。弥六郎は嫡子景久であろう。

### その後の遠山家

『武家列伝』によると遠山政景は、天正八年(一五八〇)に死去。嫡子の直景が江戸城代を継ぎ、同十五年に死去している。家督は犬千代が継ぎ、江戸時代は旗本家として存続している。

『寛政重修諸家譜』は直景↓秀重↓直定↓直政としているが、文書史料から判明する系譜とは大きく異なる。

特に直景は永正七年(一五二〇)正月八日卒、秀重は「小田原没落の後、處士となり河村彌次郎が元にて養はる。元和四年(一六一八)七月七日死す。法名正鐵」は全く史料に見えない。

直定は「氏直に仕へ諱の字をさづけられて直定と稱す。天正十九年六月はじめて東照宮にまみえ奉り(以下略)」として寛政八年(一七九六)までの遠山家継続が確認できる。

犬千代と直定は同一人物が確認でき、略系図に記した。

分家遠山康光家

また、綱景の弟が分家の遠山康光で、康光室の妹が三代氏康の側室と言われているが(黒田基樹他)、名前も法名も判明していない。

遠山康光は左衛門尉を称し三代氏康に仕えていたが、元龜元年(一五七〇)の相越同盟により上杉謙信の養子に入った三郎(景虎)に従って越後に移る。三郎は、康光室の妹が氏康の側室に上がり生まれた子と推定され、康光はそうした関係から甥の家老として越後に赴いたと言われている。

天正七年(一五七九)の謙信没後に生じた「御館の乱」に敗れ、景虎と共に自刃したことは諸書に記されている。

『寛政重修諸家譜』は直次からで、次のように記している。

「左衛門尉、丹波守、遠山丹波 某が男。北條家に仕へ三郎景虎、上杉謙信が養子たるのとき、従ひて家老となる。天正七年(寛永系圖五年)に作る。今諸記録に従ふ)三月十七日景虎、景勝と合戦のとき、景虎自から勝べからざるを知り、我妻子を敵の手に渡すことなかれと命ず、直次すなわち

城中に歸り、その妻子を殺し城に火を放ちて自殺す。法名浄連、妻は上杉三郎景虎が伯母」

この記述は、明らかに遠山康光のことであるが、妻子を殺したとするのは異説である。続いて嫡子遠山直吉を記している。

「はじめ北條氏直に仕ふ、天正十八年小田原没落のとき、東照宮の御麾下に召さるといへども、直吉は彼家譜第(譜代)の臣たるにより、氏直に従ひて高野山に至らむことをこひ奉りしかば、再び仰ありけるは氏直を送り、速やかに歸りて仕へ奉つるべし。妻子をば心に任せていづくにも置くべしとなり。これによりて妻子を相模國中郡白根郷に移しをらしめ、本多彌八郎正純に就てその趣を言上せしかば、七月十六日御黒印を賜はりて、これを慰せらる。十九年より仕へ奉り采地三百石を賜ひ、大番となり後、肥前國名護屋及び關原の役にも従ひ奉り、凱旋の後、新恩百石を賜ひ、其後勝姫君松平三河守忠直に嫁せらる、のとき、御輿に添て越前國に至る。(中略)慶長十六年十月二十七日死す、年四十九(貞享呈書及び今の呈譜五十)。法名宗吟(今の呈譜源覺)。下総國千

葉郡宇那谷村の大正寺に葬る。妻は中村但馬守胤連が女」遠山直吉は、高野山行きを請い願ったとあり興味深い。

妻子は家康により相模国白根郷(現伊勢原市)に屋敷を与えられている。その後、直吉は徳川家旗本として四百石で大番を勤めて慶長十七年十月に死去、嫡男景綱が跡を継いでいる。白根郷は、『小田原衆所領役帳』に「小田原衆 遠山左衛門」とあり、康光当時から所領と分かる。

こうした優遇も、二代直景の娘が家康側室英勝院お梶との風説もあるが、英勝院は太田康資と浄心院の子、または江戸重通の娘で康資養子の二説が言われている。

なお、氏直の高野山入りに山角直繁も同道している。直繁は、縁戚略系図にある綱景息女と大道寺政繁の嫡子である。



写真 遠山直景位牌 (延命寺)

後記 『風土記稿』足柄上郡川西村(山北町)の記述が注目される。

「新城跡(前略)天正十八年、小田原籠城の時、遠山左衛門尉景政江戸より爰に來たりて守衛せり、(武蹟譚)曰、矢倉澤に御番所あり、小田原より勤番なり、北の方山手に新庄の城蹟あり、天正十八年には武州江戸の遠山左衛門景政、此所に來たりて守衛す、かくて東照宮甲州先方の士を向けられ、遂に當城を陥れ給ふ」

このことは、『関東古戦録』も同様に「遠山左衛門尉景政」を記しているが、系図等史料に「景政」は見られない。

「左衛門尉」は分家「康光」家の称であるが：

なお、ドラマでお馴染みの北町奉行の遠山金四郎景元の祖先も、明知遠山家の分家であるという。金さんも「左衛門尉」を称していた。

そして、『風土記稿』は、延命寺に直景後室「まつくす」の位牌も安置されていたとして法名も記している。同寺には是非、御位牌を再製し、「夫婦の牌あり」の再現を期待したい。

# 神奈中の「小田原町」バス停について

渡邊 喜治

小田原駅東口のバスロータリーで、黄色にオレンジ帯の神奈中バスの車体を最近見かけないと思われまいだろうか(写真2)。それもその筈で、現状の神奈中の路線は原則国府津駅止まりで、酒匂川を越えて西側へやって来ることはないからである。

中には「この前見た」と言われる方もおられるかも知れない。その人は見間違えたのではなく、今回説明させていたただく貴重な例外を目撃したのである。

以下、この謎の路線について判っていることを披歴させて頂くが、まだ歴史の仲間入りをする様な事象でもなく、関連情報をお持ちの方の助けを借りてより完成度の高めていければと願う次第である。

## 平44・平45系統について

冒頭に記した様に原則国府津駅止まりの神奈中バスに例外が存在し、それがこれら二系統のバス路線である。

神奈中バスは休日に一往復だけ国府津駅〜小田原駅を走

らせており、平44系統が平塚駅から小田原駅までの路線、帰りが平45系統である。

日曜の朝七時五十分頃に駅前ロータリーに向くと懐かしい神奈中バスのツートンカラーが現れるのを目撃できる。短い駅前滞在を終えて折り返し、七時五十五分発の平塚駅行きとなつて走り去って行く。

七日間で一本だけなので無きに等しいが、これは俗に言う「免許維持路線」である。一旦、免許を返上してから再取得するのは困難が伴うので(最悪の場合、既存並行路線ありで不許可に)、維持する価値があると踏めば細々と走らせて実績を残しておくことになる。

## 「小田原町」バス停について

上記の平44系統は「素直」に国府津方面から東海道を走って市民会館前を右折し、郵便局前(A・図1参照、以下同)・緑町(B)両バス停を経由して駅前ロータリー(C)に辿りつく。ところが、戻りの平45系統は駅前ロータリーを出ると最初のバス停であろう緑町

を素通りして交差点を左折してしまふ。そして高橋写真館近くの小田原町バス停(D)に停まると浜町へと抜ける。

この謎のバス停「小田原町」(読みは「おだわらちよう」)のポールにも時刻表は掲示されているが、見事に休日の朝七時台一か所にボツンと数字「56」が存在するだけで、如実に「免許維持路線」振りを体現している(写真1)。

住宅地図でD地点のバス停の推移を確認すると、平成二年版までの地図では(第二の「緑町」と表記されているのが、同四年版からは「小田原町」の表記に変わっている。従つて、平成三年頃に誕生の比較的新しいバス停と

言うことになる。しかし、神奈中社史に当たると、既に五十年史が出た一九七一年時点で附録の路線一覧には(当時は現行と系統名が異なり)平26・27系統として挙がつており(図2)、起点は平塚駅で変わらないが、終点は前者が小田原駅なのに対し、後者は小田原町と書かれている。これは後の社史にも当てはまり、小田原駅行



図1 現在の神奈中バス 栄町付近路線図



写真1 小田原町バス停(春のダイヤ改正前)





写真 2 小田原駅東口ロータリーに到着した神奈中バスの平 44 系統

きと小田原町行きはそれぞれ、一九八二年の六十年史では平 29・30 系統、一九九一年の七十年史では、平 44・45 系統となっている。

因みに、市勢統計中の該当路線の終点名は小田原駅と小田原市緑町であり（昭和四十八年度まで。以降は項目消滅で判明せず）、こちらは実勢を反映した記載となっている。

神奈中には自治体名に「町」を足した人為的な名称のバス停を作る文化があり（注参照）、謎の小田原町というバス停もこうした一連の動きの一貫として誕生したと推察されるが、内部事情で恣意的に案出した名称につき対外的には通りのよい（第二の）緑町を名乗り続けたのではないかと思われる。平成三年頃に弾けてバス停表示が小田原町となった経緯

は不明だが、市勢統計等に見る様に、以前は小田原駅行きが一日六往復、小田原町行きが同二十往復と結構な本数があったものが、昭和四十八年時点で後者は日十往復に減り、現行に合わせて週一往復という「免許維持路線」の実態を呈する寂しさになった時点で存在をアピールする目的もあって本名の「小田原町」に戻したのではなからうか。

（注）昭和二十七〜二十八年に開始された国鉄との連絡運輸関連では「町」バス停に、上溝町・秦野町・厚木町・長後町バス停があるが、当時既に自治体の上溝町は無く、秦野町も上宿からの強引な改称で、長後も村だった時期しかないなどの根無し草状態が目立つ。その後も、横浜市泉区に中田町バス停が昭和五十年代に新設されており（現在は廃止）、社史で一九七一年までは辿れる小田原町バス停はこの間の事例に該当する。こうしたバス停命名の詳細については小著『神奈川 駅尽くし』を参照されたい。

免許維持の現状と今後

社史中の両系統の運行キロは、小田原駅へは二十二・六 km なのに対し、小田原町へは往十二・三 km・復二十一・八 km

で、駅には行かずに手前の小田原町にタッチして帰る後者群はその分短い（駅前の混雑回避という利点はあるかも知れない）。浜町へのショートカットになる復路は更に短くなっており、外見上は二路線が存在するかの様だ。

現行路線は既述の様に、平 44・45 系統の一往復で以前の小田原駅線と小田原（市緑）町線とでカバーした範囲を網羅し、免許維持の役目を果たしているのが判る。

神奈中は去る三月二十六に平塚駅〜国府津駅を従来の三十三往復から三往復（しかも平日日中のみの運行）へ激減させ、幸い平 44・45 系統は安泰だが、本体も「免許維持路線」に近い姿にやせ細る事態となった。

既述の様に、臨時便を含めて将来復活の可能性があると見做されて、本路線を維持しているであろうが、事情によっては廃止となる可能性もあり、今後の動向には注目して行きたい。

付け足：小田原市公式サイトのデジタル・アーカイブ中に、昭和六十三年制作の「城下町・宿場町おだわらの町名・地名」があり、新宿町を紹介する七分三十五秒附近に「平 44 平塚駅〜小田原駅」の方向幕を掲げた神奈中バス



図 2 1971 年の神奈中バス 栄町付近路

の姿が写っている。

アップになるバス停ポールは箱根登山なのに、敢えて神奈中バスを素材に用いたのが謎ではあるが貴重な記録ではある。

参考文献

- 『市勢統計要覧』各年（小田原市）
- 『小田原市明細地図』各年（明細地図社）
- 『住宅地図小田原市西部』各年（ゼンリン）
- 『小田原市史・通史編・近現代』（小田原市二〇〇一年）

（筆者略歴）二宮町出身。昭和三三年生まれ。東京大学理学部卒業後、電機メーカー勤務を経て、現在二宮町民大学サポーター。歴史と鉄道をテーマに活動中。

## 小田原桐座について(六)

— 由緒書の検討を中心に —

荒河 純

### 四、小田原桐座の横浜進出

#### (五) 横浜桐座芝居小屋の実在

これまでの検討で、安政六年(一八五九)十月中頃、小田原桐座の大橋四郎治義友とその娘である桐尾上は開港直後の横浜に進出、芝居小屋を建設し、そこで芝居興行を行っていた可能性を三井商店の記録などから明らかにした。

次の課題は、実際にその桐座の建物が他の資料によって確認できるかどうかである。横浜開港資料館の斎藤多喜夫は、先の下田座の興行開始が安政六年からであるとしたりもう一つの根拠として、万延元年(一八六〇)五雲亭貞秀によって描かれた横浜絵地図の一つである「横浜本町景港崎街新廓」において(1)、海岸通り付近に芝居小屋がはつきりと描かれていることを挙げている。もし桐座がこの時期に建てられたとすれば、下田座と同様、これらの横浜絵地図の中にその存在が認められるはずだと考えた。そこで横浜開港直後から多く描かれている横浜絵地図でコピーも含めて閲覧可能なものを全てを確認した。すると、その中の一枚に一丁

目裏通り付近に芝居小屋が描かれているものを見出したのである。それは、五雲亭貞秀画「東海道名所之内横浜風景」である(2)(図1)。

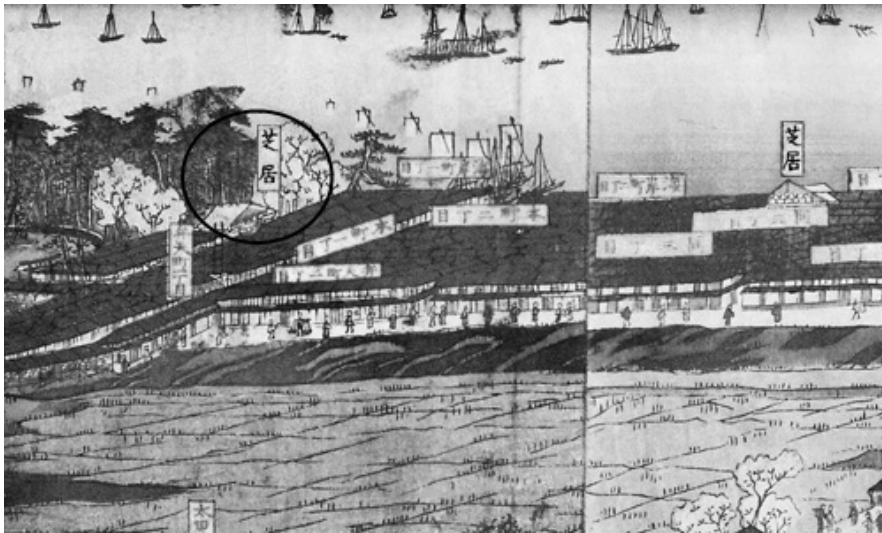


図1. 五雲亭貞秀画「東海道名所之内横浜風景」の一部抜粋  
(三井文庫所蔵)

次に、この一枚の位置づけを明確にするために、安政六年後半から万延元年にかけて同じ五雲亭貞秀によって描かれた横浜絵地図をまとめたのが表1である。なぜ五雲亭貞秀に限ったかという点、貞秀が最も早い時期から横浜を描いていることと、それに彼は事実に基づき綿密に描いていることで定評があったからである(3)。

それぞれの絵が描かれた時期は記録が有るものと無いものがあり、記録の無いものは街の様子、主に川、橋、建物などからおよその時期を推定した。ここで注意が必要なのは、桜が多く描かれているが必ずしもその時期に描かれたわけではなく、これらは写実と言うより装飾的なものと考えられるからである。

この結果、桐座の芝居小屋が描かれているのは、万延元年二月から三月に発行された「東海道名所之内横浜風景」のみであることが分かった。この絵は、万延元年二月に完成したことになっている石川中村川尻から増徳院脇を通り海

岸迄の幅十間の掘割が、未だ描かれていないので(4)、二月以前の風景を写したものと考えられる。従って、先号で述べたように三井商店の『永書』(5)の記述から、十月半ばに小屋ができたと思えば、この絵図は安政六年十月半ばから翌万延元年二月の風景が描かれていると結論される。

またこれらの絵図から、下田座の位置が時期によって移動していることも分かった。即ち、安政六年後半の地図では二丁目となっていたのが、上記絵図「東海道名所之内横浜風景」に描かれている下田座は三丁目に存在するようにみえる。その後描かれた「横浜本町景港崎街新廓」(万延元年閏三月発行)(1)および、「横浜大湊細見之図」(万延元年六月発行か)(6)においては、二丁目に描かれている。これが事実かどうか断定はできないが、もし事実だと仮定すると、神奈川から移って間もない時期(安政六年末から万延元年初頃)の下田座は、先ず三丁目に仮小屋を建てて興行し、その後二丁目に正式な小屋を建てて移ったという可能性が考えられる。

### (六) 由緒書との相違点

ここまでの検証では、横浜絵図を中心に、一丁目裏通に下田座とは別の芝居小屋が存在したこと、三井商店の絵地図からそれが小

表1 安政6年後半から万延元年における五雲亭貞秀の横浜絵地図

制作推定時期	絵地図名	板元	所蔵
安政6	7		
	8	新栄堂	横浜、開港、県博、 県立、三井など
	9		
	10	同上	県立、
	11		
	12		
安政7	1		
	2	宝善堂 丸屋徳蔵	横浜、開港、県博、 三井など
万延1	3	山口屋藤兵衛	県博
	閏3	宝善堂 丸屋徳蔵	横浜、開港、県立、 県博など
	4	糸谷庄兵衛	開港、国会
	5	辻国屋文助	横浜、県博など
	6	大国屋平吉	横浜、開港、県博など
	7		
	8		

\*横浜: 横浜市立図書館  
 \*開港: 横浜開港資料館  
 \*県立: 神奈川県立図書館

\*県博: 神奈川県立博物館  
 \*三井: 三井文庫  
 \*国会: 国会図書館

田原桐座であったことを明らかにした。  
 しかし、この事実は、小田原桐座の由緒書にある(7)「旧弁天通ニ於テ五十間四方ノ地ヲ拝借仕」という記述に対して、その場所、地積の両方において矛盾する。すなわち、一丁目裏通は旧弁天通とは明らかに異なるし、三井の絵地図から推定される芝居地所の地積もせいぜい十五間四方程度である。この矛盾は、当初計画と実段階との違いと考えることが

求めて、やはり桐座の芝居取建請願直後の横浜絵地図を探してみたい。すると、安政六年仲夏(五月)発行「神奈川御開港横浜絵図」(8)および「安政六未夏神奈川表横浜御開港之正図」(9)(図2)において、太田屋新田のなかに、「芝居地所」と記された広大な地所が存在したことを見いだした。  
 さらに、同年六月に刷られた瓦版である「五方国御貿易場」(10)には、明らかに想像図ではあるが、

できる。  
 当初は、弁天通に面したところに大規模な芝居施設を計画したが、何らかの不都合があり、一丁目裏通に規模を縮小した形で実現したと考えると説明がつく。あるいは、当面の措置として一丁目裏通で興行し、いずれは弁天通の方へ移るつもりであったのかもしれない。  
 そこで次の課題として、当初計画の痕跡がどこかに無いかと考えた。その痕跡を

大橋四郎治義友が芝居小屋取建を申請した安政六年四月頃の太田屋新田では、六月の開港に間に合わせるべく遊廓建設のための埋立工事が行われていた。その前月の三月には、

埋立完成後の太田屋新田のなかに、御免遊女廓取立場所と並んで広大な芝居地所が描かれていることから、当初の桐座の建設予定地は太田屋新田で遊廓と併設する形で計画されていたものと考えられる。  
 また、地名の問題だが、当時は未だ太田町は存在しなかったため、弁天通に面していた太田屋新田は「旧弁天通」という表現になったと推定される。  
 では、何故当初の計画と異なり、一丁目裏通に地所を移さざるを得なかったのか、という問題を考えてみる。そのことを直接示す史料は見つかっていないが、港崎遊廓建設の経緯などから想像するに、太田屋新田開発の困難さが最大の原因であったと推定される。

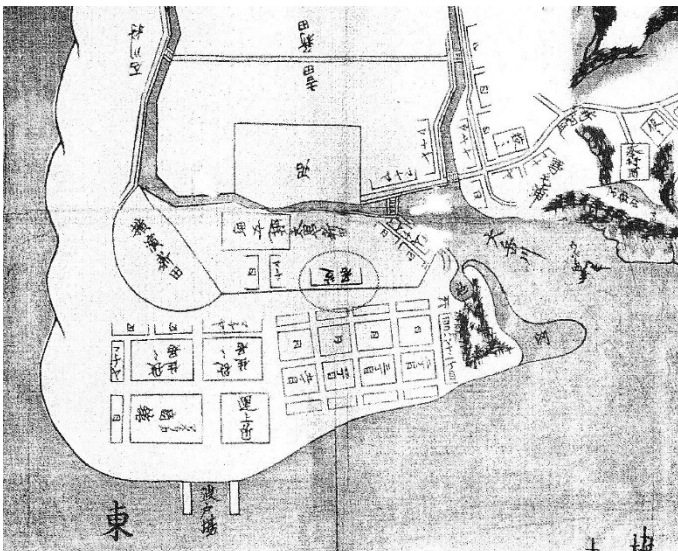


図2 「安政六未夏神奈川表横浜開港之正図」  
 (横浜開港資料館所蔵)の抜粋

土木工事に予想以上の費用がかかることから、神奈川宿旅籠屋四十二軒などが当初予定していた商人が手を引き、品川宿旅籠屋である岩槻屋佐吉が遊廓建設を一手に引き受け、規模も予定の半分に縮小するという計画変更をしての急普請の最中であった。それでも完成予定の六月から大きく遅れ、実際に営業を開始できたのは十一月になってからである(11)。  
 おそらく、取建を請願した四月から芝居興行の許可が下りた七月の間に横浜を訪れた大橋義友は、この遊廓建設のための土木工

事を見たであろう。その結果、太田屋新田を自力で埋立て芝居小屋を建設することがいかに困難な事業であるかを悟ったに違いない。そこで、もつと小規模で直ぐに興行が始められる場所を探した。それが一丁目裏通であったのではなからうか。

しかし、大橋義友は何故そこまで横浜進出に熱心だったのか？当初の計画を大幅に変更してまでも横浜にこだわる理由は何だったのだろうか？資料的な根拠は皆無だが、小田原桐家すなわち大橋家に対し、幕府の方から横浜に芝居小屋建設の要請が内々にあったものと私は考えている。大橋義友がこの要請に応えるべく動いていたとすれば、そう簡単に諦められなかったことがよく理解できるのである。

表2に、これらの桐座の横浜進出の経緯を簡単にまとめた。

（七）桐座の横浜からの撤退

その後、この横浜の桐座はどのように推移していったのだろうか。先の三井『永書』において、「一向不入之趣」と評されているので、興行的にはかなり不振であったと思われる。

また、五雲亭貞秀の横浜絵地図のうち、先に挙げた万延元年六月発行と推定されている『横浜大湊細見之図』（6）には、弁天社側の

芝居小屋即ち桐座は影も形も無い。さらに、万延元年閏三月発行の「横浜本町景崎崎街新廓」（1）においては、海岸通二丁目の芝居小屋（下田座）は明確に描かれているが、一丁目裏通の芝居小屋のあった場所は、小屋の形を留めず白地で不明瞭なものに描かれており、芝居小屋を壊した直後の様子を表している可能性がある。

これらのことから、既に万延元年閏三月の時点では、桐座は芝居小屋を畳んでいた可能性が高い。万延元年三月から閏三月の間で小屋を解体したのであれば、横浜に桐座が存在した期間は、安政六年十月から翌万延元年三月までの約六ヶ月と推定される（表2）。

次に横浜からの桐座の撤退の理由について考察してみる。先の三井の『永書』の記述にあるように、小田原桐座の興行が不振、すなわち出し物や値段が新開地横浜の観客に受け入れられなかったというのが直接的な原因と考えられる。桐座の興行スタイルそのものが新開地のニーズと乖離していたという推定も成り立つが、大橋義友のこれまでの活動ぶりから考えると、当初不振であったにしても直ぐに修正を行ったはずで、わずか半年で断念するとは思えないのである。

もし興行主の熱意の喪失があったと仮定すると、桐座の横浜進

出を推進していた大橋義友の健康上の問題があったのではなからうか。それを裏付けるように、『大橋家過去帳』によると（12）、大橋四郎治義友の項には、「遠城院光達日相、万延元年三月十八日（没）五十二歳」とある。まさに、横浜から桐座が消滅したとほぼ時を同じくして、大橋義友もこの世を去っているのである。

安政六年十月の芝居小屋建設までは元気であった義友は、いざ興行となった十一月に急に体調を崩し、興行に力が入らなかつたのかもしれない。しかし、これを裏付ける日記等の史料は見つかっていない。

では、大橋義友が倒れたとしても、すでに家督を継いでいる長男の大橋林當が引き継いで興行を続ければ良い。

しかし、なぜ林當は横浜興行を引き継がなかつたのであろうか。これを推測する史料として、大橋林當によって晩年に書かれた『雑記』（13）が大橋家に遺されている。この中で、父義友の死に関する記述は僅か一行しかない。「安政七年三月父病死す茲に因て一日他に出るを止む」と書かれている。

この『雑記』に書かれている林

表2 安政6年から万延元年における桐座、下田座関連記録

年	月	桐座	下田座	横浜全体動向
安政6	4	常芝居願書 外国奉行から老中へ		
	5			
	6			仮遊廓営業開始
	7	常芝居願書 新地拝借（由緒書）	（横浜進出）	横浜開港 神奈川宿 飯盛女禁止
	8		（人形芝居、曲馬興行）	
	9			
	10	芝居普請出来（永書）		権現山陣屋建設
	11			港崎遊廓営業開始
	12			番屋、木戸を設置
安政7	1			
	2			掘割完成
万延1	3	大橋義友死去		
	閏3			

當の履歴を読むと、若い頃から剣術一筋で、その大半が剣術修行の事で埋められている。例えば、十八歳の時、江戸に出て尾州侯剣術師範であった百々鉄太郎の内弟子となつて一刀流を習い、二十一歳のときには八王子で松崎正作の門人となつて天然理心流剣法を学び、さらに二十五歳のときに京都で禁中北面の侍を志願したのが成らず、大坂城代の従臣水野武

庫之介に槍術を学んだ。嘉永六年小田原地震で家屋倒壊の際に小田原に戻ったが、翌年にはまた水戸藩士加藤木新十郎の内弟子となつて神道無念流剣術を学び、免状受けて水戸藩での士分取立寸前までいったことなどである。

ここで、先の文面「一旦他に出るを止む」の意味は、剣術修行で他所へ行って滞在するのを一旦止めるという意味と思われる。当然、小田原に戻つても桐座の経営に専念したわけではなく、父の死の翌年である文久元年には、「小田原藩士にして越後流之軍学師範役として戸田二連木久操先生の門に入り従来数年間上杉家直伝の兵法を学び日夜怠慢なく勉強して遂に武門要鑑抄二十二伝を书写し」などと書かれているように、武術兵法に関する興味は尽きなかったようである。

このように、父親の義友とは全く異なつた性向の持ち主である大橋林當にとつて、芝居経営に対する情熱は薄く、辛うじて先祖代々引き継いできた小田原桐座の維持がやつとで、新開地横浜での芝居興行には全く興味が無かつたと推測される。さらに言えば、水戸藩士になることに執着していた林當は、尊皇攘夷に傾倒していた可能性が高い。とすれば、外国人相手に横浜で芝居興行することなど言語道断のものであろう。

従つて、林當が書いた「由緒書」における義友の横浜進出に関して、「(前略) 小屋普請金主半途ニテ異変ニ相成依之右ノ拜借ノ地所其儘上地ニ致候」という淡々とした表現になっているのも、この林當の性向を持つてすれば理解できるのである。

こうして、横浜に桐座が存在したのは僅か六ヶ月足らずのことであつたが、本格的な芝居小屋に対する期待は大きなものがあつた。

その後の横浜では、文久元年(一八六一) 下田座は常芝居小屋建設を申請して許可が得られなかつたが、それまでも行つていた子供手踊の名目で粘り強く興行を続けつつ、徐々に本芝居への脱皮を図つた。そして遂に慶応元年(一八六五) 十二月には中村座一行が下田座で大芝居興行を打てるくらい、下田座は横浜の演劇界を牽引するようになったのである(14)。その後の横浜芝居の隆盛は周知の通りである。(つづく)

注

- (1) 五雲亭貞秀画「横浜本町景港崎街新廓(写)」山口屋藤兵衛板、万延元年閏三月改、横浜開港資料館所蔵
- (2) 五雲亭貞秀画「東海道名所之内横浜風景」丸徳板、「横浜美屋希全」一、万延元年二、三月、三

館所蔵

井文庫所蔵

- (3) 乙部純子「開港から居留地撤廃にいたる横浜図の変遷とその画期―民間図を中心に―」『地図』通巻一六五号、二〇〇四年
- (4) 太田久好「横浜沿革史・全」有隣堂、一九七〇年
- (5) 『永書』安政六年十一月、三井文庫所蔵
- (6) 五雲亭貞秀画「横浜大湊細見之図」辻国屋文助板、神奈川歴史博物館蔵
- (7) 石井富之助「劇場桐座由緒書」『神奈川県史研究』第九号、神奈川県企画 調査部県史編集室、一九七〇年
- (8) 「神奈川御開港横浜絵写」旦望社、安政六年仲夏、五味文庫、横浜開港資料館所蔵
- (9) 「安政六年未夏神奈川表横浜御開港之正図」、東玉堂、安政六年夏、五味文庫、横浜開港資料館所蔵
- (10) 「五カ国御貿易場」安政六年六月改板、横浜開港資料館所蔵
- (11) 岩壁義光編「横浜絵地図」有隣堂、六六頁、一九八九年
- (12) 『大橋家過去帳(抜粋)』青蛙荘文庫、小田原市立図書館所蔵
- (13) 大橋林當『雜記』、明治三十七年、大橋家所蔵
- (14) 「横浜演劇史年表」、『横浜の芝居と劇場』横浜開港資料館一九九二年

(付記) 本稿は「藝能史研究」第二〇七号所収、荒河純著「小田原桐座の開港地横浜進出」に加筆したものである。

新会員紹介

名前(敬称略) 住所  
 中村 恵司 小田原市曾比  
 立木 文子 小田原市穴部

キャンパスおたわら学習講座<公募型市民企画講座>

歴史講座『小田原史談会セミナー』第14回

新シリーズ「小田原の歴史を掘る」開講 好評 第6回!

日 時: 平成28年8月27日(土) 午前10時~12時  
 場 所: 小田原市民交流センター(UMECO) 1階 第5・6会議室  
 講 座: 『江戸時代の小田原』 講師: 小田原市文化財課 学芸員  
 申 込 先 小田原生涯学習センター けやきの会  
 定員/費用 50名 / 500円

## 片岡日記 昭和編(七)

片岡 永左衛門

昭和二年十一月

四日 雨

去る廿八日にて規定の會期を了たるも原案通過に至らざりし。土地賃貸價格調査委員會ハ再會招集にて出席。星野大藏省東京稅務監督局經理課長出席。再交渉を開く。

五日 雨

委員會ニ出席。四時より銀行同盟會ニ出席。九時半塔之沢より帰宅。

六日 晴

早房長徳來訪。午后より淘席。加奈子去る三日より来りしに今夕帰京。

七日 晴

委員會出席。上下郡賃貸總額、金參百十萬円の二厘、六千二百円低減ニ妥協成立ニ解決し、三時半散會。

八日 雨

甚た寒し。

九日 晴

十日 晴

十一日 晴

国府津淘席ニ出席。九時半帰宅。

十二日 晴

十三日 晴

帝大史料編纂掛より日向藥師を見学の通知を得たので、昭和二年十一月十三日八時發の急行電車ニ乗り伊勢原ニ下車したは八時三十五分。待程もなく新宿發の電車の着すると壹番先に横濱の中山毎吉君が見へ、君は屹度御出と思たと云乍ら来る。後より相田史料編纂官補、大森博士も来られ、総員十三人となる。是より徒歩して伊勢原の大神宮を参拝、見学した。是は古墳と云事ニ皆々一致した。それより日向に向た。途中、頼朝の駒繫松は近く右方の太枝か折れ葉は散り失せしか、枝のまた残りしはまたしもて在た。此根本に一同集り撮影した。それ程とも思ざりし路を一里半も歩行して二王門に達した傍に日向藥師宝城坊の石標がある。此(此処)に古は数坊有りしに今は壹坊となりしか。又は別に寺院も有りしかと思ひながら石坂を登ると丹朱の堂か正面に在る。境内は掃除も届き曆應の銘ある鐘堂の傍に心も晴々と、すらりと伸た老杉の二株か目に入れて心も惹附られた。

御佛を守の神屋居ますらむ

仰く日向のふた本の杉

客殿に至れば住職の挨拶に來り。先つ一同持參の弁當を開く。當坊には別に見るべき文書は保存せず、食後坊主に本堂に導かれ読経開扉し一同礼拝し、国宝の藥師如来、阿彌陀如来、日光月光菩薩、四天王、十二神將も拝したか、十二神將は少し見劣の感があるか、聞処によると曆應の銘ある梵鐘と貫連(関連)する為に国宝に認められしと云ことである。見渡した処諸佛の安置し方、窮くつに見ゆるは此外ニ幾個の殿堂在しなるへし。弘安と彫刻

した板碑も見たか、是に因ると先日海老名より貰受た所藏の板碑は年号の無きも、時代に於て大差なく思われる。帰途は上糟屋に廻り、太田道灌を殺害した上杉の館址を見たか景勝の地て昔の偲る、。

山吹の色なつかしみ散り失せし

かすやの里を秋風にとふ

東(洞)昌院に道灌の胴塚を拜して式内高部屋神社に参拝した。糟屋氏の城址と聞も時代より推すれば社を城内に取込しか、又ハ城址に他より社を移せしのみか研究の余地はあると思ふ。中山氏は此の本社址は古墳の遺蹟ならむと云れしか俄に同意も出来ぬ。夫より大慈院に道灌首塚と傳ふる墓地も拜したか如何のものか。贈位の策命ノ碑は東昌院内ノ胴塚に建設せられた。當院の門の構造ハ他に異り三足門諭た。伊勢原停車場に着したは五時を過ぎた。一行と別れ電車を待て七時に帰宅した。

十四日 晴

十五日 雨

本店ニ出張、帰宅後石黒祝儀ニ至り八時帰宅。

十六日 晴

井沢多ひ・康兩人宿泊。

十七日 晴

瀬戸秀兄君來訪。

十八日 晴

十九日 晴

若江先生御來車ニテ洵席。

式十日 晴

廿一日 晴

廿二日 晴

小田君と俄に畑(畑宿)に全行する事となつた。午後一時発の電車に漸々間合ひ三枚橋にて下車した。震災後道路修繕も出来、架橋も落成し面目を一新した。元治年中の海道(東海道)図にハ、三枚橋領主御普請土橋長式十式間、中式間ト記入し、橋の東にハ湯本村ノ内字三枚橋、家数六軒、西には湯本村ノ内下宿、家数二十四軒、塔之沢ニ七町とある。橋を渡り間道を早雲寺の境内に入ると、生垣を廻らし老樹に交る紅葉、堂塔の棟も見へ、奈良の薬師寺を遠望した時の感しを連想した。境内の竹内君に立寄、茶の馳走を受け門を出ると、門前で旧図には湯本村の内字寺門前、家数八軒とある。両側の農家箱細工挽物なす家と、家の垣根などより差出たる紅葉・菊・たりや(タリア)の花に目を喜した。少しゆくと堂の前にて、旧図には湯(ママ)湯本堂の前、焼失當時壱軒とあるか今は拾余軒も軒を並へたり。何(何れ)も半農半工で木地挽・箱細工も見受られる。正眼寺を左に見て小坂となり、両側には旧街道の並木の老松も所に残り昔しの様をも偲はれる。坂を登た所は湯本茶屋で昔は通行の旅人か多く休息した。旧図にハ湯本茶屋家数三十三軒とあり、中程には壱里塚の遺蹟もある。道路は余程に切下けたれば両側の人家は傾き見る位のもある。此地も挽物箱細工をする家が多い。人家を出離る、と道は須雲川の左岸となり山容水態が一変した。旧道ハ両側の並木の敷地が高く歩道ハ年々に

土を流して低く、須雲川は水声を聞も殆と見るを得なかつたか、震災にて並木敷ハ河原に落込みしに、加へて新道は車の通行に使用する為低地を高くし山の右麓を廻り、川の左岸となり甚た景色かよくなつた。須雲川の入口で一休した。旧図にハ須雲川村家数三十三軒とある。此村の加藤君に行逢た。先年御目に掛た節に山越も是か最後かとの事てしたか又御目に掛たか結構な事と笑て行過ぎられた。行々好景を賞し歩行すると新千鳥橋に來た。左の足下に旧道の千鳥橋か見へる。震災前は石橋にて、酒匂の千貫橋と同構造で欄干も石造て有たか今見ると板橋た。旧図には、御領主御普請、長式間・巾式間とある。旧道ハ畑(畑宿)に入るに千鳥橋より一坂を登たか新道ハ平坦である。是に因りても新道の旧道より高地に開鑿し隨て眺望もよいのである。旧図には畑宿より須雲川村中程迄、式十六町式十六間半、家数四拾五軒とある。今は凡三十軒て夫も年々減少する。昔は旅人の通行多く海道稼も出来、附近の山々より材料を切出し、挽物細工・箱細工もなしたるに、今は從來の稼は勿論材木も切尽したれば、箱挽物の材料は小田原辺より持登り、加工品ハ持下るので如何に古郷忘し難しとハ雖も生活に止不得退傳(退轉)するとハ時勢の然らしむるのて又止を得ぬ次第た。用事も暫にして済み直に帰途につき小田原に着したは六時を過ぎた。

廿三日 晴

廿四日 晴

廿五日 晴

十一日(時)発気車にて程ヶ谷ニ下車。円福寺

に至り高田の佛事ニ列席し、横濱ニ廻り、午後九時に帰宅した。

廿六日 晴

三時三十分発に熱海野田に至り、御傳を済し十時ニ帰宅。

廿七日 晴

午前笠原を見舞。午後ハ五時より一藤木の洵席ニ行。

廿八日 晴

本店ニ行く。

廿九日 雨

甚た寒し。

三十日 曇

十一月 晴

午前十時ニ忠魂碑除幕式を執行。忠魂碑紀念碑ハ先年建設ノ當初ニ於テ、拙者ハ其位置は小峯を適當トナセシニ、箱根口多門矢倉蹟ニ建設シタルニ、震災ニ破壊し此度新に地を小峯ニ撰定シタリ。先ノ碑ハ鳴鶴先生ノ揮毫ナリしか、破損セシト雖も継合セテ新碑傍にても置キ度ものなり。

二日 晴

今朝途中にて小峯氏ニ出逢、忠魂碑の談ニ及ひしニ、旧碑の断片ハ新碑の下の(ニ)埋たとの事て有つた。

出勤前ニ板橋の伴野熊次郎の案内にて震災後の小峯門の遺蹟を見たか、以前とは余程地形を變した。後證ニ見聞を書留る。

順路は香林寺の門前を左ニ畑道を登り、百八

拾八番地の西の地先ニある松の根元を空堀より登ると一枚畑。此地を畑に開墾の時にハ瓦の破片を多く出し、其中にハ三鱗の紋瓦の在り。一枚畑の中程ニありし井戸ニ土石ト共埋込たりト云。今ハ井戸の跡形もなし。村繪図にハ道路ハ空堀際ニテ行止りとなりしも、以前伴野氏の四代前久七氏の時代の水帳にハ、一枚畑に此道の通する如に記入し有るを記憶(憶)せりと。此水帳ハ何年ニ調製せしかは今判然せざるも、久七氏ハ凡(凡そ)式百年斗り前の人なれば其時代ならんと。此久七氏ハ當時板橋の村役人ニテ其為に伴野氏ニ水帳の残りしなるべし。さるに先年出火ニ焼失なしたりと。

三日 晴

此一両日来横濱貿易新聞ニ沼田頼輔の箱根神社と萬巻上人の記事か有る。其中ニ大夫坊覚明の箱根神社の縁起か今も神社ニ所蔵せられて有るとしてあるか、何かの間違ならむ昨年登山の時ニ社司早山氏ノ談ニ縁起等も今ハ傳來せず何ら古代の事ハ不明で、杜格昇進の出願にも差支ると維新前ニ印刷した木板の縁起の断片を出し是のみと見せられた。午后三時発にて上京、親一方ニ止宿。一家元氣にて大喜び。

十四日(四日) 晴

昨日電車中にて川口氏之談ニ因れば、米ハ十五年以来の農作(豊作)なりと。  
午前高木氏を往訪。折よく面會。

荒井医師ニより品川より乗車。大嶋実結婚披露に横濱山下町クレセントクラブニ至ル。是ハ建築ハ、ハラツクナレ共、佛国料理テハ目下日本ニ於テ第一ナリト。散會後高田方ニ至

り止宿。

十五日(五日) 晴

八時廿三分発気車ニ乗車し午后出勤。昨年ハいかの近年希なる大漁なるに、本年希なる不漁。天の配利不思議(議)もなし。

六日

七日 曇

若江先生御出席洵席。夕刻より定時會ニ至り、八時半帰宅。

八日 晴

午后三時より史料採搜ニ長興山ニ行き五時帰宅。

九日 雨

先日来、郵便局新築敷地予定地ヲ試掘セシニ、十五尺の下よりハ砂利を出し五拾尺下よりハ灰色の溶岩を出したり。此地旧城の三の丸ノ堀跡なるか。溶岩ハ箱根憤火(噴火)ノ遺物にて砂利ハ酒匂ノ流域ナル可きか。

十日 雨

十一日 晴

親一、小倉嘉明氏中将ニ昇進の祝宴の為ニ来り、午后十時帰京。

十二日 晴

近衛歩兵第三聯隊付明治大学服務陸軍歩兵中佐摺澤真清氏の依頼より全校生徒ニ旧城天守台ニ於テ小田原城の講演をなす。

氏ハ震災處々地警備ノ為ニ陸軍より派遣セ

ラレシ人ナリ。

講演の帰途に堀端にて

城堀の水にうつれりやればてし

土手のす、きも松のみとりも

十三日 晴

十四日

十五日

十六日 晴

五時発にて岩田氏全行、熱海野田氏洵席ニ至り十時帰宅。

十七日 晴

午后より洵席、五時発にて嶋田氏に梅花を持参。

十八日

細君上京。九時頃より初雪、直に雨となり又直に晴る。午后より長興山元境内なる田邊別邸内の板碑の研究に行く。先年主人は死亡しなしたるも、留守居の老婦の話に因れば五年以前より京都の旅館松屋より送り来りしものなりと。

会員の方へお願い

—新規会員募集—

小田原史談会では常時新規会員を募集しています。郷土の歴史に興味をお持ちの方にぜひ会員になつていただくよう、お誘い下さい。申し込みは史談会役員または左記へ連絡願います。会費は年額三千元。

小田原市堀之内三一・一五

電話 ○四六五三七七 一八八

植田士郎



〔五月研修会報告〕  
江戸の二本となった小田原  
早川上水と用水が巡る小田  
原城大外郭西南稜を歩く

鳥居 泰一郎

まず、早川取水口に行く。こ  
こで早川から水を取り入れてい  
る堰の状況などを見学。

次に、板橋の旧東海道の裏手  
を流れる水路と、風祭で荻窪用  
水から分けられ古稀庵へ配水さ  
れている山縣水道とも合流して  
いるという場所を見る。

さらに水路に沿って東に行く  
と、やがて大イチョウが目印と  
なっている光円寺の西北裏手に  
ぶつかる。ここで水路は、大外  
郭土塁の外側を流れるものと、  
小田原城下に流れるものと分れ  
る。

小田原城下への水は、光円寺  
隣の居神社(もとは井神社と  
と呼ばれていた)の境内を通っ  
て城下に入るために、この場  
所に水神を祀っている。その場  
所を確認し、大外郭の西部の  
虎口である早川口遺構へ、水路  
にそって行き、遺構を見学。こ  
こは、河岸段丘を利用した土塁、  
空堀と外側のかき揚げ土塁の一  
部がみられた。

そこからさらに東へ、かき揚  
げ土塁と小田原用水の分流水路



に沿って移動。現在は土塁上に  
住宅ができ、水路の水の量もわ  
ずかになっており当時の面影は  
全くなくなっている。

荒久のお台場跡なども、説明  
を受けて初めて「そうか。ここ  
に江戸時代は砲台があったのか」  
とわかるくらいである。現在は、  
ミニ公園の様である。

そのお台場の一部、初代文部  
大臣となった森有礼の別荘が建  
てられていた跡に、「藤館」があ  
った。この建物は、一藤木さん  
が持っているらしい。「片岡永左  
衛門日記」を読むと、しばしば、  
「一藤木に淘席」という文があ  
るが、ここで行ったものではな  
いだろうか。

水路はさらに東に進み、大蓮

寺のところから海へ流れ出てい  
る。その大蓮寺では、片岡永左  
衛門及び片岡家の墓を見学する。  
その後、滄浪閣跡と土塁を見  
学し小西薬局へ向かう。小西薬  
局では店の左手の門の中に、東  
海道沿いに流れてきている用水  
路から引き込まれた石製の水路  
の上部を見た。この引水は庭の  
池に使われたという。

東海道に沿ってさらに東に行  
き、御幸の浜交差点まで進むと、  
交差点の路面に「小田原用水」  
と記されたマンホールがあった。  
これは小田原用水路から小田原  
城二の丸の堀へ分水しているこ  
ろだ。

途中片岡本陣跡や明治天皇行  
在所など見て、最後の見学場所  
山上蒲鉾店へ。ここでは、蒲鉾  
を作っている様子を見学。地下  
百メートル以上の深い井戸を掘  
って水をくみ上げて利用してい  
るとのことであつた。

今回の見学を通  
して「水と人」とい  
う係わりについて  
改めて考えさせら  
れた。

以前に、シリヤ・  
ヨルダンを旅した  
ことがあったが、  
その時にクラッ  
ク・デ・シュバリエ

という古城は、小高い山の上に  
あつたが、地下に雨水をためる  
ことができるといふ作りにして  
あつた。この城は度々十字軍に  
攻められたけれど、落城せずに  
持ちこたえたといわれている。  
また、ペトラ遺跡ではペトラ  
の町に水を引くために、町の入  
口に流れていた川をせき止めて、  
狭い砂岩の崖の壁に水路を作り、  
約1キロ先の町まで水を引いた  
といわれている。

何れも千年以上前の話である。  
人にとって水は有り難いもので  
あるし、場合によっては怖いも  
のでもある。  
なお、早川上水(小田原用水)  
については、石井啓文さんが『小  
田原史談』百八十六、百八十七、  
百八十九、百九十の各号に連載  
しているので、参考にしてほし  
い。



ペトラ遺跡

水路拡



平成 28年

## 総 会 報 告

小田原史談会

○ 日 時	平成28年5月7日(土)	13時~14時
○ 場 所	小田原市民会館	6階 第7会議室

司会 鳥居泰一郎 (史談会理事) 議長 田中 豊 (史談会理事) 書記 松島俊樹 (史談会理事)

議事次第

第1号議案 平成27年度事業報告

1. 一般報告

- ・総会で確認された27年度事業計画に沿った活動を実施した。
- ・広報活動として会報「小田原史談」を年間4回定期発行し、研修活動については「史跡巡りの旅」を年4回企画したが、諸般の事情によって3回の実施が出来なかった。今後は更に慎重に計画を練り、実施できるよう努める。歴史講座「小田原史談会セミナー」を計画通り年4回定期開催し、各回とも多くに聴講者を集め好評を博した。また、ホーム・ページを全面リニューアルし、充実・強化した。定例理事会を毎月定例開催し、その都度事業計画の実施状況を点検し、新規企画や新たな実施計画を検討した。なお毎回議事終了後「役員研修」を実施した。

2. 関係団体との交流・他

- ・小田原市文化連盟の構成員として、小田原市民文化祭に参加した。
- ・「小田原・足柄歴史研究六団体」との協力・連携を引き続き強化し第3回「歴史団体合同展示会」(平成28年6月開催予定)に向けての歴史解説パネルの製作に着手した。
- ・NPO法人小田原生涯学習センターと協力して「公募型市民講座」として「小田原史談会セミナー」を定期開催した。
- ・「北条氏政、氏照公墓前祭」に参加した。市民活動サポート・センターの発展的解散に伴い、「おだわら市民交流センター」に加盟し、「小田原史談会活動紹介パネルを展示」など各種行事に参加した。

3. 各事業委員会報告

(1) 広報委員会報告

① 会報4回発行

- 241号 「小田原桐座について(一)一由緒書の検討を中心に」他
- 242号 「戦後七十年 昭和世代の戦時体験」他
- 243号 「大老堀田正俊刺殺の真相(上)」他
- 244号 「小田原十字町の教会と九萬象さんと」他

② ホームページの部分的リニューアル実施

メニューを縦型から横型へ 史跡めぐり紀行文を年度単位へ 管理担当者の変更

③ 既刊「小田原史談」全号のデジタル・アーカイブを作成、

(2) 研修委員会報告

① 総会時の講演会 5月9日(土) 演題「大老堀田正俊刺殺事件の真相」講師:下重 清氏(東海大学非常勤講師)

② 史跡めぐり 小田原城総構(西側)をめぐる 5月22日 他3回は中止

(3) セミナー委員会報告 計4回の歴史講座「小田原を掘るシリーズ」を開催

- ① 旧石器・縄文時代の小田原 5月30日 講師:土屋 健作氏
- ② 弥生・古墳時代前期の小田原 8月29日 講師:土屋 了介氏
- ③ 古墳・奈良・平安時代の小田原 12月19日 講師:渡辺 千尋氏
- ④ 鎌倉・室町時代の小田原 2月27日 講師:吉田 千沙子氏

計4回の開催。いずれの会も好評を博した。

第2号議案 平成27年度 一般会計報告(別項)、特別会計報告並びに監査報告

第3号議案 平成28年度 事業方針

1. 基本方針

- ・小田原史談会の基本方針にそって、会員とともに発展する史談会を目指す。
- ・小田原史談会の活動の充実・強化を図る活動として、会報「小田原史談」の定期発行を継続するとともに、内容の一層の充実・強化に努める。
- ・広く会員の研修活動としての「史跡巡りの旅」の実施については、前年度の中止企画の検証をもとに、企画全般にわたって十分に検討の上、「史跡巡り」の旅の充実と健全・安全な実行をはかる。
- ・史談会セミナーも第4年目を迎えるべく内容の充実を努める。
- ・ホーム・ページを常時点検し、親しまれ充実した内容の提供に努める。
- ・小田原足柄地区の歴史研究団体との交流・連携を引き続き重視し、地域の歴史・自然・文化の発展を協力して進めるほか、関係団体との協力を強めるため、「歴史六団体合同展示会」の成功を期する。
- ・会員の高齢化などの進行に伴う会員の漸減傾向に対応するとともに、運営経費の節減・合理的運用に努める。

2. 各事業委員会の活動計画

(1) 広報委員会計画

① 会報「小田原史談」の定期発行（年 4 回）② 「小田原史談」総既刊号「PDF」化による活用を検討。③ 貴重な「埋もれた歴史資料」の発掘・公開に協力する ④ リニューアルしたホームページのコンテンツを更に点検・修正を行う。ホームページのメンテナンス担当を強化する。

(2) 研修委員会計画

① 講演会(総会時) 演題 「明石人骨発見者 直良信夫を語る」 講師 杉山 博久氏  
② 史跡めぐり 本年度も初詣を含み計 4 回の実施予定。  
1) 江戸の手本となった早川上水と用水が巡る小田原城大外郭西南縁を歩く 5月21日(土)  
史跡めぐりについては、小田原の歴史との関連性を考慮し、目的地・時期を改めて検証し日程等実施計画を立案し、「会報」等で発表する。実施時期については、5月を除いて、10月、1月、3月の実施を予定する。

(3) セミナー委員会計画

1) 5月28日(土)「小田原を掘るシリーズ 北条時代の小田原」 2) 8月27日(土)「小田原を掘るシリーズ 江戸時代」 3) 11月27日(土)「火の国イタリアと日本」 4) 2月25日(土)「箱根関所の発掘(仮)」

第 4 号議案 平成 28 年度一般会計予算(略)

第 5 号議案 平成 28 年度新役員 理事 飯田 宗男

以上の総会議案はすべて満場一致で承認されました。

第2号議案

平成27年度 一般会計決算報告

Table with 5 columns: 収入の部, 項目, 27年度予算額, 27年度決算額, 増・減(-), 適用. Rows include 前年度繰越金, 会費, 賛助会費, 雑収入, 専門部会費, 計.

Table with 5 columns: 支出の部, 項目, 27年度予算額, 27年度決算額, 増・減(-), 適用. Rows include 総会費, 会議費, 通信費, 会報発送費, 交際費, 事務消耗品費, 振込手数料, 印刷費, HP管理費, 会報印刷費, 専門委員会費, ロッカ-借用代, 会場費, 予備費, 計.

Summary table for 平成27年度 一般会計収支決算. 収入 1,414,752, 支出 1,170,046, 残高 244,706.

上記の通り平成27年度一般会計の収支決算を報告いたします。残高 244,706円は、平成28年度一般会計予算に組入れます。平成28年3月31日

会計 杉山 虔一 ㊞

会計監査報告

会計検査の結果、一般会計、特別会計ともに帳簿の処理、領収書・証憑の管理など、適切に処理されていたことを報告します。

平成28年4月5日

会計監査 佐久間 俊治 ㊞
会計監査 高田 知予子 ㊞

第三回 歴史団体合同展示会開催

去る六月一七日(一九日、開成町民センター)で「第三回小田原・足柄六団体合同展示会」が開催されました。

小田原史談会を始め足柄史談会、足柄の歴史再発見クラブ、山北町、大井町の各郷土史研究会、南足柄歴史同好会の各団体が、それぞれ独自のテーマでパネル、歴史遺物などを一堂に展示する、一年に一度のイベントで、三日間多くの来場者を迎えて開催されました。

小田原史談会では、「小田原と周辺地区の劇場・映画館」をテーマに、小田原市街地とその周辺の地域にあった、懐かしい劇場(芝居小屋・寄席)そして映画館(活動写真館)の場所や開館期間を詳細にパネルで表示したほか、特集として「小田原桐座」の変遷を表示しました。加えて、「懐かしい日本映画スチール集」「懐かしい洋画ポスター集」なども展示し、来場者の興味を集めました。

開催期間を通じて五五〇人を越える来場者が、熱心に各団体の展示物をご覧になり、鋭い質問をされたり懐かしい思い出を話合われたりしながら、楽しい一刻を過ごしておられました。

次回には明後年に南足柄市で開催される計画です。

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ**

手打<sup>そとん</sup>小田原城趾前 田毎

税理士法人 **報徳会計**

のれんと味 **ぶるほ**

**伊勢治書店**

茶半家具株式会社

㊦ **かまぼこ**

**ちんぎょう本店**

(株) **オクツ薬局**

割烹料理<sup>うなぎ</sup> **鳥かつ楼**

㊧ **小田原ガス**

和菓子 **菜の花**

小田原報徳自動車

杉崎茂法律事務所

かまぼこ籠 **清**

平井書店

かみやま小児科クリニック

(有) **古屋花店**

**興電社**

株式会社 **報徳**

**本多時計店**

建築金物(株)星崎仲吉商店  
家庭金物

(有) **小松石材店**

学生専科 **㊨ マルク**

**COMTEC コムテック株式会社**

曾我の梅干  
塩辛・かまぼこ **美の政**

**さがみ信用金庫**

(株) **アルファ**

小田原史談(年四回発行)  
創刊昭和三十六年一月  
会創立昭和二十七年七月

禁無断転載

振替  
年会費 普通会員三千円  
〇〇二〇二六四三三六  
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

落穂集

かつて小田原でも盛んだった謡曲について、中津川悦子さんにお聴きしました。伝統を続けて行くことの大切さ、「一度途切れたらダメなのよ」という言葉が印象に残りました。▼史談会報では「聞き書」をよく掲載しますが、これは「テープ起し」と言われています。平成三年一月(第一四三号)の落穂集を見ていたら、この「テープ起し」という言葉は未だ国語辞典に載っていないと書かれていました。試しに十数年前に買った電子辞書で引いてみると、広辞苑に「テープ起し：テープに録音した音声文字化すること」というようにちゃんと載っていました。しかし、録音メディアとしてテープが用いられなくなった今、この言葉がいつまで用いられるのか疑問です。▼スマホの検索も音声で行う時代です。音声入力ソフトを試してみました。日常会話はともかく、テープ起しにはまだまだでした。▼去る六月二十六日・閉館近くの市民会館第七会議室にて、第十回小田原市文化セミナーとして「温故知新・小田原桐座」の講演を行いました。本会報連載の内容を中心に約二時間にわたって話をしました。百名を越える参加者で、予想外の関心の高さに驚きました。当日、桐座の近所の方などからの情報提供もあり演者にとっては有り難い機会でもありました。これは次回の原稿に反映させたいと思っています。▼本号から編集を担当することになりました。歴史的な深さを追究するのはもちろんですが、より幅広い話題を載せたいと思っています。会員の皆様からの積極的な情報を期待しています。よろしくお願ひします。(明日太こと荒河純)

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

南足柄市関本七三〇六  
電話 〇四六五七三〇八七九

荒河純